

富山県南砺市

東殿遺跡
徳成Ⅱ遺跡

―― 県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(6) ――

2006年3月

南砺市教育委員会



東殿遺跡 7 地区出土の漆器椀 (上) 内面・(下) 外面

序

南砺市中央部に位置する北山田南部地区は、山田川左岸の河岸段丘上に位置します。県営ほ場整備事業に伴い調査が行われ、縄文時代から中世まで様々な遺跡が発見され、多くの歴史遺産が埋蔵されていることがわかりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業（担い手育成型）の実施に伴う東殿遺跡、徳成Ⅱ遺跡の発掘調査です。当地区におけるほ場整備事業関連の遺跡発掘調査は、平成10年度の試掘調査から始まりました。遺跡の大半は盛土により保存し、用排水路用地及び一部の水田削平部分について本調査を実施してきました。

今年度調査では、中世の掘立柱建物、竪穴状土坑、土坑、井戸、溝などの遺構を確認しました。また、縄文土器、中世土師器、珠洲、下駄などの木製品、砥石、包丁などの縄文、中世期の遺物が出土しました。本書は、その調査結果をまとめたものです。郷土の歴史解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

この調査の実施にあたり、富山県農林水産部・ほ場整備事業北山田南部地区委員会・南砺市シルバー人材センターをはじめ、地元住民の方々に多くなご協力を賜りましたことに対し、深く感謝するものであります。

平成18年3月

南砺市教育委員会

教育長 植 桐 角 也

例　　言

- 本書は、県営は場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う富山県南砺市東殿遺跡、徳成II遺跡の発掘調査概要である。
- 調査は、富山県農地林務部の委託を受け、南砺市教育委員会が実施した。地元負担金については、南砺市教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。また、調査の一部は市教委が委託監理のもと、株式会社中部日本鉱業研究所が行った。
- 調査事務局は南砺市教育委員会文化課においていた。各事務担当者は以下のとおりである。

調査組織	南砺市教育委員会 文化課
調査責任者	文化課課長 上田一郎
調査事務官	同 文化財係長 林 浩明
調査事務及び調査担当	文化財保護課主事 佐藤 梨子

各遺跡の調査期間、調査面積は、以下のとおりである。

遺跡名	調査区	調査面積	調査期間
東殿遺跡	6地区	145m ²	平成17年5月30日～同年7月1日
	7地区	66m ²	平成17年6月13日～同年7月1日
	8地区	291m ²	平成17年6月21日～同年8月5日
	9地区	403m ²	平成17年8月25日～同年9月30日
徳成II遺跡	9地区	104m ²	平成17年7月11日～同年9月16日

4 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。

古島重夫・太崎 勇・宮田修・山田政寛（敬称略・五十音順）

5 本書で使用した方位は真北である。上層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著 1967『新版標準土地帖』日本色研書業株式会社を用いた。

6 調査参加者は次のとおりである。

片田行儀・棚田俊雄・林長敏・水口良男・水口善嗣・溝口外雄・山川 賢庄

上島勝枝・大井川桂子・大島笑子・大門ソト・山田きみ子（発掘作業）

石崎三枝子・銀治麗子・西川和美（現地調査補助及び遺物整理作業）

目　　次

I 位置と環境	1	第13回 東殿遺跡9地区的遺構	22
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第14回 徳成II遺跡の遺構	23
II 調査に至る経緯と経過	2	第15回 東殿遺跡6地区・7地区(1)の遺物	24
第1表 調査経過	2	第16回 東殿遺跡7地区的遺物(2)	25
第2表 遺跡の概要	2	第17回 東殿遺跡7地区(3)の遺物	26
第2図 遺跡範囲と調査区位置図	3	第18回 東殿遺跡8地区的遺物(1)	27
III 調査の概要	4	第19回 東殿遺跡8地区(2)・9地区(3)・徳成II遺跡9地区的遺物	28
1. 調査の経過	4	図版1 東殿遺跡6地区的遺構	
2. 調査の方法	4	図版2 東殿遺跡7地区的遺構	
3. 東殿遺跡の概要	4	図版3 東殿遺跡8地区的遺構(1)	
第3図 東殿遺跡基本底図	4	図版4 東殿遺跡8地区的遺構(2)	
4. 徳成II遺跡9地区的概要	10	図版5 東殿遺跡8地区的遺構(3)	
第4図 徳成II遺跡基本底図	10	図版6 東殿遺跡9地区的遺構(1)	
IV まとめ	10	図版7 東殿遺跡9地区的遺構(2)	
参考文献	11	図版8 東殿遺跡9地区(3)・徳成II遺跡9地区的遺構	
第5図 東殿遺跡6地区的遺構平面図	13	図版9 東殿遺跡6地区・徳成II遺跡9地区的遺物	
第6図 調査区割図	15	図版10 東殿遺跡7地区的遺物(1)	
第7図 東殿遺跡7地区的遺構平面図	16	図版11 東殿遺跡7地区的遺物(2)	
第8図 東殿遺跡6地区・7地区的遺構	17	図版12 東殿遺跡7地区的遺物(3)	
第9図 東殿遺跡8地区的遺構平面図	18	図版13 東殿遺跡8地区的遺物(1)	
第10図 東殿遺跡8地区的遺構(1)	19	図版14 東殿遺跡8地区的遺物(2)	
第11図 東殿遺跡8地区的遺構(2)	20	図版15 東殿遺跡8地区的遺物(3)	
第12図 東殿遺跡9地区的遺構平面図	21	図版16 東殿遺跡9地区的遺物	

I 位置と環境

富山県南砺市は、西側を石川県、南側を岐阜県との県境をなす富山県の南西部に位置する。市の西側から南側にかけては、養老三年（719）、泰澄大師によって開山されたといわれる靈峰医王山をはじめとするなどらかな山脈が連なる。大門山に源を発する小矢部川が、市の中心部を南北に貫流し、その東を流れる山田川とともに、市の東北部から北に向かって広がる砺波平野を形成している。

東殿・徳成Ⅱ遺跡は、小矢部川の支流である山田川左岸、河岸段丘上に立地する。標高約86～89mを測る当遺跡は、縄文、古代、中世の遺跡として周知されている。縄文時代では、東殿遺跡に草創期の石槍を、徳成遺跡に中・後期、東殿Ⅲ遺跡には後期後半にあたる遺構、遺物を確認している。さらにその周辺には、北側に前期のうずら山遺跡、中期の宗守遺跡、西側には中・後期の竹林遺跡、東側山田川右岸には縄文晚期井口式の指標となる井口遺跡が存在する。

弥生、古墳時代には、徳成Ⅱ遺跡より竪穴住居と考えられる落込みと高坏が出土している。北側の梅原地区からは、梅原胡麻堂遺跡より中期の土器・管玉・石鐵が出土し、梅原安丸Ⅲ遺跡では、古墳時代の竪穴住居1棟を検出している。古代では、在房遺跡の本調査により掘立柱建物群が確認されている。また、文献資料によると、福光町の一部が礪波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ば



第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1:25,000)

れ官倉がおかれていた事が知られる。

梅原胡麻堂遺跡は、県内中世集落の指標ともなっている。このように、北山田地区周辺では、連綿と人々が生活を続けていたことがわかる。

II 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

平成8年（1996年）、徳成・東殿・利根河の3地区を含む北山田南部地区において、県営は場整備事業（扱い手育成型）実施の計画が策定された。この事業は、北山田南部地区95haを対象とし、平成9年度より14年度を事業実施年とあてていた。しかし、対象地内には周知の遺跡として縄文時代中・後期の徳成遺跡、縄文時代の石槍が出土している東殿遺跡が存在していたこと、同じく河岸段丘上に位置する北側の梅原地区では、縄文時代から中世まで多数の遺跡が確認されていたことから、対象地区内にも遺跡が存在することが予想された。このことから、福光町教育委員会（当時：以下、町教委）では、県埋蔵文化財センターより調査員の派遣を受け、平成8年12月に分布調査を実施したところ、遺物の散布を確認し、対象地区内に新たに4つの遺跡が存在することがわかった。

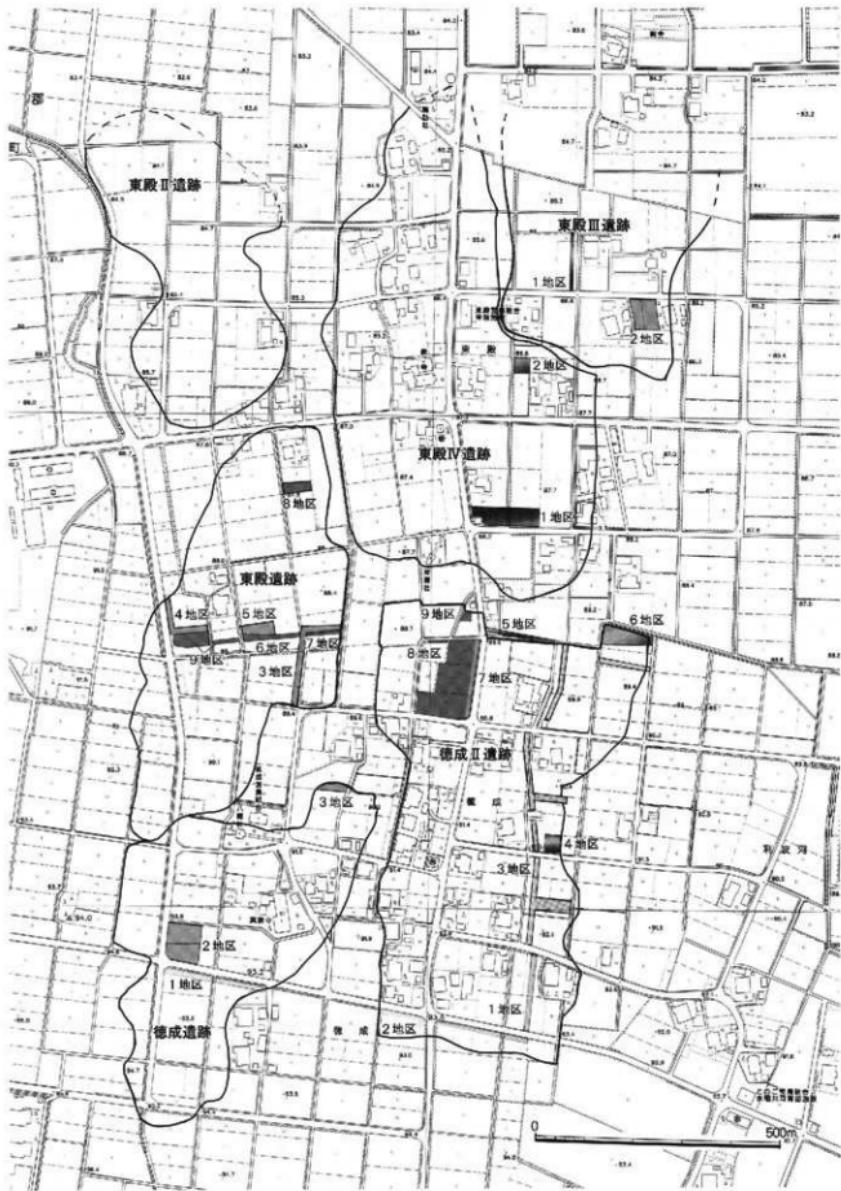
町教委では、遺物の散布が認められた部分において、平成10年から団庫補助金をうけて試掘調査を実施した。バックフォウによって田に何箇所か筋堀をし、地山が検出できるまで掘り下げ、遺物包含層及び遺構の有無、遺跡の遺存高を標高で確認するといった作業を行ったところ、遺跡の遺存状況が良好な箇所が多く確認された。このことから、遺跡の保護措置について、県農地林務部・県教育委員会・地元土地改良区と協議し、遺跡が存在する箇所については、は場整備工事施工に際しては盛土を行う事で水田下に保存し、一部の面工事、農道建設、用排水路着工部分について本調査を実施する事となった。また事業の進捗状況をかんがみ、平成16年度より調査の一部を南砺市教育委員会監理の下に委託し、本年度は株式会社中部日本鉱業研究所に委託した。調査は田面調整箇所、排水路着工箇所である。なお、本年度をもって本事業に伴う本調査を終了することになった。これまでの調査面積、遺跡の内容は次のとおりである。

第1表 調査経過

年度	試掘調査面積	調査対象遺跡	本調査面積	調査対象遺跡	備考
10	3.69ha	徳成 II	—	—	
11	21.45ha	徳成・徳成 II・東殿 III・東殿 IV	—	—	
12	2.00ha	徳成	1,000m ²	徳成 II	
13	14.19ha	東殿・東殿 II・東殿 IV	900m ²	徳成・徳成 II	
14	3.00ha	東殿 II・東殿 III	1,515m ²	徳成 II	
15	—	—	2,860m ²	徳成 II・東殿 III・東殿 IV	
16	—	—	3,542m ²	徳成・東殿・東殿 III	内、2,940m ² を㈱イビソクに委託
17	—	—	3,847m ²	東殿・徳成 II	内、2,838m ² を㈱中部日本鉱業研究所に委託

第2表 遺跡の概要

遺跡名	帰属時代	検出遺構	出土遺物
徳成	縄文中期～後期・古代・中世・近世以降	土坑・溝・ピット	縄文土器・須恵器・中世土師器・陶磁器
徳成 II	縄文後期後半・古墳前期・古代・中世・近世以降	土坑(住居?)・溝・ピット	土師器・須恵器・中世土師器・青磁・越前・陶磁器
東殿	縄文・中世	土坑・溝・ピット	珠網・中世土師器・濾戸
東殿 II	古代・中世・近代	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・中世土師器・珠網
東殿 III	縄文後期後半・古代・中世・近世以降	かづき・焼土塊・土坑・溝・ピット	縄文土器・土師器・須恵器・中世土師器・珠網・越前・陶磁器
東殿 IV	古代・中世・近代	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・中世土師器・銅貨



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (S=1:5,000)

III 調査の概要

1. 調査の経過

17年度本発掘調査は、東殿遺跡が遺跡中央部から北側にかけて4箇所、徳成II遺跡が遺跡北西端に1箇所となる。調査区の名称は、昨年度までの調査区の名称を引き続き付してある。東殿遺跡が6地区:145m²、7地区:66m²、8地区:291m²、9地区:403m²、徳成II遺跡9地区が104m²である。6・7地区は、排水路新規着工箇所である。8地区は田面調整箇所であり、9地区は田面調整及び排水路新規着工箇所である。

2. 調査の方法

調査は、まず重機で耕土などの無遺物層の除去を行い、その後調査区に合わせておおよその東西南北の方向に合わせ、基準杭を10mごとに設置し、調査区割を行った。区割は、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを1区画としてアラビア数字でその位置を示した。

包含層掘削・遺構検出・遺構掘削等は調査員及び作業員が行い、上層図・出土状況図の作成は調査員及び調査補助員が担当した。遺構平面図の作成は、東殿遺跡8・9地区についてはラジコンヘリコプターにより撮影した写真から図化し、他の地区はメッシュ測量及び平板測量により作成した。また8地区では井戸を7基検出したが、堀方が狭小で、検出面から底面までの深さが平均約3mと人力掘削によって底面を確認するのは困難であったことから、平面図化用の空撮後、重機による断ち割り作業を行い、底面までの上層堆積状況を確認した。

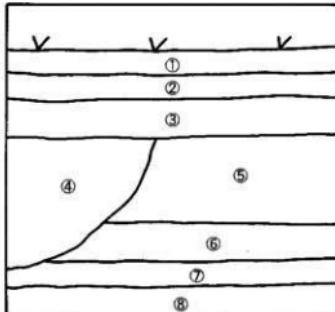
3. 東殿遺跡の概要

(1) 地形と層序 (第2・3図)

四箇所の調査区は、遺跡中央から北側に位置する。周辺の地形は、南から北に、また谷部が存在する遺跡東側に向かって、西から東に緩やかに傾斜している。四調査区は、山田川左岸の河岸段丘上に位置し、調査区西側には南北に権現堂川が流れる。標高は、約86.80～88.50mを測る。6・8地区は削平を受け、耕土直下で地山が露出する箇所が大半である。7・9地区は、比較的遺存状況が良好である。そのうち7地区の基本的な層序は、1層目：耕作土、2層目：黄色褐色土（盛土）、3層目：黒褐色土（中世の遺物包含層）、4層目：遺構、5層目：暗茶褐色粘質土（漸移層）、6層目：黄褐色土混じりの黑色土（整地層か）、7層目：黒色粘質土、8層目：黄色褐色粘土（地山）となる。7地区的遺構の大半は、5層目上面から切り込んでいる。近世以降の掘り込みが、若干3層目上面から確認できる。また、ごく少量の上師器が7層目より出土したが、時期の特定はできなかつた。

(2) 6地区・遺構の概要 (第6・8図、図版1)

6地区は、東西方向に伸びる約2m×58mの排水路着工部分と、30m²の田面削平部分からなる。大半において、耕土直下で黄褐色砂砾の地山面が露出しており、昭和30年代実施のは場整備に削平を受けたよう



第3図 東殿遺跡基本層序図

である。遺構は、掘立柱建物1棟、土坑1基、溝4条、そのほかピット数基を検出している。

SB01は調査区内の西寄り、X 1～3、Y 2～6部分に位置する。建物が調査区外北側に広がっており、全容はつかめない。東西2間×南北2間以上の縦柱建物である。堀方は40～60cmの楕円形もしくは方形で、深さ20～40cmを測る。換出面も削平を受けたようである。出土遺物は無く詳細時期は不明であるが、埋土から中世期の遺構と考えられる。

SD01は調査区東端、X 0～1、Y 26に位置する。幅約1.6m、深さ40～50cmで、ほぼ南北に伸びる。溝の立ち上がりはやや急で、断面形は逆台形である。埋土は、黒褐色土に地山上である黄色褐色土が大量に混じる。出土遺物には、中世土師器がある。

SD02は、SD01の西側70～80cmに隣接し、SD01同様南北に伸びる溝である。幅約2m、深さ30～40cmである。断面形はSD01と同様逆台形であり、立ち上がりも急である。埋土もほぼ同様であり、地山上が大量に混じる黒褐色土である。出土遺物には、中世土師器・皿がある。

SD03は調査区中央、X 0～3、Y 7～8部分に位置する。幅約1.8m、深さ約80cmである。底面は平坦で、立ち上がりはやや急であり、断面は逆台形状である。溝は南北方向に伸び、SD01・02と方向は同様である。平成16年度調査区で検出したSD01の延長である。埋土は黒褐色粘質土であり、出土遺物には中世土師器、珠洲がある。

SB01の西側、Y 0～2で確認したピットに、規則性をもって配置されているものはない。直径約50cm前後の楕円形、深さ30～80cmのピットがほとんどである。堀上はやや粘質の黒色土もしくは黒褐色土である。ピットは、調査区北西端に集中しており、あるいは調査区外に存在する掘立柱建物の柱穴の一部であるかもしれない。

Y 16～23部分で南北とも調査区外に伸びる溝・SD04は、近代の流路跡である。この調査区が位置する東殿地区の南側、徳成地区的八幡社付近は湧水量が多く、現在も豊富に水が湧き出ている。その箇所から北側の低位置に向かって水流があったようである。灰褐色粘土が堆積している。出土遺物には、珠洲がある。

(3) 6地区・遺物の概要(第15図、図版9)

縄文土器(後期・晚期の深鉢破片)、須恵器・甕、中世土師器が出土した。以下図化したものについて記述する。

1～12はすべて中世土師器・皿である。1は口径11.6cm、器高3.3cmを測る。底面から口縁はまっすぐ外反し、口縁下でやや外にくびれる。底面は糸切りであり、SD01出土である。2は口径8.4cm、器高2.3cmである。3は、口径9cmを測る。4は口径13cmを測る。体部でやや屈曲する。5は器壁がやや厚めで、体部で緩く屈曲している。口径10cmを測る。6は口径15cmとやや大型である。口縁端部は細くつまみあげる。7は口径14cm、口縁端部で外にやや屈曲する。8の口縁はほぼまっすぐに外に伸びる。11径は11cmを測る。9は、SD02出土である。平坦な底面にやや外に外反する口縁部を持つ。底径は8.6cm、11径は10cmを測る。10は厚い体部に外反する細い口縁部を持つ。口径9cmを測る。11は口径10cmを測る。器壁は全体に厚く、口縁端部でさらに厚みを持つ。12は口縁がゆるく外反し、端部をとがらせている。口径は8.4cmである。これらのうち、1～4、6～8は、ロクロ成形、それ以外は非ロクロ成形である。15世紀後半が主である。

(4) 7地区・遺構の概要(第7・8図、図版2)

7地区は、東西方向に伸びる約2m×33mの排水路施設部分である。遺跡の遺存状況は良好であり、調査区の中央部から東側は、館跡に伴う堀と考えられる溝内にあたる。溝からは、中世土師器、珠洲、漆器椀などの木製品が大量に出土した。その他、井戸1基、溝1条、ピット数基を検出した。

SE01は、調査区西側のX 2、Y 2に位置する。遺構の北側半分は調査区外であり、全容はつかめない。

直径約1.2m、深さ約2mである。埋土は黒褐色粘質土と黄褐色土の互層で出土遺物はない。

SD01は、X 0～2、Y 6～12に位置する。幅約3m、深さ約1.5～1.7mである。調査区中央を南東から北西に貫いており、それぞれ調査区外に伸びている。溝の立ち上がりはやや急であり、断面は半円状を呈している。堆土は、やや粘質の黒褐色土に地山土がブロック状に混じる。出土遺物には、中世土師器、珠洲がある。出土遺物から、溝の存続時期は14世紀後半から15世紀後半と考えられる。

SD02は、SD01の北側に位置する。一部分切りあっており、SD01がSD02を切っている。溝の向きは、SD01に沿っており、調査区を南東から北西に貫き、それぞれ調査区外に伸びている。Y12から東側は、完全に溝内にあたり、堀方は南側のみ確認したため、溝の幅は2.5m以上となる。溝の立ち上がりは急であり、底面は平坦であったようだが、掘り込み底面近くになると湧水が激しく、詳細はわからなかった。埋土は、灰褐色粘質土、黒褐色粘質土、大量に植物遺体を含む層、黒褐色粘質土混じりの黄褐色粘土、底面近くは暗緑灰色粘土であった。堆積土層を確認すると、逆三角形に近い切込みが確認できる。このことから、溝の存続時期は少なくとも2時期あったようで、一旦埋め戻し、整地した後に再び溝として機能していたと考えられる。出土遺物には、中世土師器、珠洲、火鉢などの瓦質土器、漆器椀、折敷の一部、付札などの木製品などがあり、これらは埋土中央から底面にかけて、大量に出土した。遺物、切りあい関係から、存続時期は14世紀前半から15世紀前半と考えられる。

東殿遺跡には、中世期に上豪の館跡があったのではないかという伝承が残っており、地区に残る明治8年の絵図には土塁跡とみられる畠地の区画が記載されている。SD01・02は、その館跡の周辺を区画していた区画溝の一部と考えられる。平成16年度の調査区においても、この2条の溝の延長を確認しているが、館跡、具体的な堀の区画は現在までの調査結果からは追えず、不明である。

ピットは、調査区の西側に集中する。堀方20～30cmの円形もしくは梢円形を呈しており、深さは50～80cmである。土層断面図に柱痕跡らしき土層の違いが確認できるが、周辺部において掘立柱建物跡のような、規則性を持って配置されているピットは確認できない。埋土は、黒褐色土もしくは黒褐色土に地山土、砂礫が少量混じったものとなる。出土遺物は無く、中世包含層の上面から切り込んでいるものがほとんどであり、このことから、時期は中世以降ではないかと考えられる。

(5) 7地区・遺物の概要（第15～17図、図版10～12）

中世土師器、珠洲、越前、八尾、瓦質土器・火鉢、木製品が出土した。以下、図化したものについて記述する。

13～33は、すべてSD02出土の中世土師器・皿である。おおまかに5タイプに分ける。

1タイプは、13～15の口径17～18cm、器高3.1～4.5cmを測る大型のロクロ成形である。底面と体部の区別はほとんど無く、口縁は斜めに緩く外反する。口縁端部は丸くおさめる。2タイプは、16～18の口径14～16cm、器高2.2～2.8cmを測る、大型で非ロクロ成形のものである。1タイプと同様、底面と体部の区別は無く、口縁も緩く外反し、端部下で扁曲させている。口縁内外面を撫でている。19～21の3タイプは、口径12cm前後、器高2～2.5cmの2タイプと比べて、やや小型の非ロクロ成形である。底面は平坦で、口縁は緩く外反する。同様に口縁を撫で、20は2段ナデとなっている。4タイプとする22～26は、口径11～12cm、器高3cm前後、底径4～5cmのロクロ成形である。回転糸切り底の底部にまっすぐ外反する体部、口縁部がつく。27～33は、口径8cm前後、底径4cm前後、器高2cm前後の、小型のロクロ成形である。5タイプとする。平坦で厚い底面に、急な角度で外反する体部、口縁部を持つ。いずれも回転糸切り底である。時期は15世紀中頃から後半にあたる。

34もSD02出土、珠洲・壺の底部である。底径は約14cmを測る。内面は摩滅している。35、36は包含層

より出土の中世土師器・皿である。35は口径12cm、器高3cm、36は口径8cm、器高2.2cm、底径4cmを測る。いずれも回転糸切り底である。35、36ともいずれも15世紀後半にあたる。

37～49は、SD02出土の木製品である。37は漆器の椀である。口径9cm、器高2.6cm、底径5.2cmを測る。内面と外側面にそれぞれ鶴、亀、松、櫛の実のモチーフが、朱色で描かれている。材質はブナである。38～40は、付札である。この3点は幅1.8～2cm、厚さ2mmを測る。38、39は下部を欠損していて、40は上下とも欠損している。それぞれ二文字ずつ字が確認でき、38には「夏ウ」、39には「○黒」、40には「本ウ」と墨でしたためられている。39の上の文字は、「中」ともとれるが判別できなかった。3点とも、材質はアスナロである。41は灯明皿を受ける台である。9.6cm長の皿を支える台に、片方に持ち手に差込むために台の下部より4.3cm外へ板状に残して加工している。台の下部から受ける側の頂点は3.8cm、厚さは5mmを測る。台の両側は、鳥頭状に加工している。板状に残した差込口は、幅8mmで、1mm程度小さく削り落としている。下部には、同一形態のものを組み合わせる際の幅5mm、深さ1cmの切り込みがある。この切り込みから丸く両側へ鳥頭状の受ける台が続く。同一形態のもう1基に上から差込み、台として使用していたと考えられる。また、差込口を残した側には、受け台の反対側の曲線と対称となる切り込みがなされていることから、あるいは製作途中で廃棄された可能性も考えられる。材質は、スギである。42、43は加工木製品である。44は折敷状木製品である。長さ25.4cm、幅7cm、厚さ2mmである。元の製品の左側半分が残存している。角を5mm程斜めに削り、全体では八角形を呈していたと考えられる。45は曲物の底板か。長さ24cm、幅6cm、厚さ3～5mmである。外辺から内に5cm程で直径3～5mmの丸い穴が2箇所確認できる。46は曲物の側板であろうか。長さ31.8cm、幅4.5～6cm、厚さ2～3mmである。中心とさらに12cm横には、それぞれ1～2mmの穴が斜めに2箇所確認できる。出土直後は、この穴に紐もしくは草の葉を1cm程の長さにし、通し結んであることが確認できた。47は籠状木製品である。長さ18.7cm、幅1.3cm、厚さが下部で2mm、上部で6mmを測る。下部5.8cmには、漆が付着しており、漆器製品を加工する際の道具ではないかと考えられる。48、49は箸状木製品である。48は長さ21.7cm、厚さが4～5mm、49は長さ25cm、厚さ4mmである。同一形態のものは、大小含めて他に約20点出土している。

(6) 8地区・遺構の概要（第9～11図、図版3～5）

8地区は、南北約11m×東西約28.5mの台形状の調査区である。耕土除去を行ったところ、黄褐色粘質土上の地山が露出する箇所が大半であった。遺構は、堅穴住居跡1棟、井戸7基、土坑9基、ピット約180基である。井戸はすべて素掘りである。ピットは検出数が多くてもかかわらず、掘立柱建物等を構成するような規則性は確認できなかった。

SI01は調査区東寄り、X1.5～3、Y10～12に位置する。南北2.8m×東西3.5mの東西に長い方形を呈しており、深さ5～15cmを測る。埋土は黒褐色土である。焼土があるカマドらしき掘り込みが、西側側辺と南西隅に確認できる。出土遺物には土師器、須恵器、中世土師器がある。出土遺物から、中世以降に一度擾乱を受けたようである。

SE01は調査区西端、X3、Y1に位置する。壙方はほぼ円形で、直径約1m、深さは約3mを測る。埋土は黒褐色粘質土であり、地山粘土層の下の礫層を40cm掘りぬいている。出土遺物には、中世土師器、珠洲、漆器椀の小片がある。

SE02は調査区南西寄り、X1、Y4に位置する。壙方はほぼ円形で、直径約80cm、深さは約2.8mを測る。埋土は黒褐色粘質土である。出土遺物には、中世土師器、珠洲がある。

SE03は調査区中央北寄り、X4、Y6でSK09内に位置する。壙方は、南側をSK09と重複しており、東西南北とも約1m、深さ約2.6mで梢円形を呈している。出土遺物には、中世土師器、珠洲がある。

SE04は調査区中央南寄り、X 1、Y 9に位置する。堀方は一辺約1.2～1.4mで、方形に近い形である。本調査区で検出した井戸の中では一番規模が大きく、深さは約3.1mを測る。埋土は黒褐色粘質土もしくは黒色粘土であり、検出面から下に30～50cmで10～15cm大の石を大量に埋め戻している。出土遺物には、中世土師器、珠洲がある。

SE05は調査区の中央北端、X 5、Y 5に位置する。SK10を切っている。堀方はほぼ円形で、直径約1.1～1.2m、深さは約3.3mを測る。埋土は黒褐色粘質土、灰褐色粘質土であり、出土遺物には中世土師器の小片がある。

SE06は調査区の中央、X 3、Y 8に位置する。SI02を切っている。堀方は不定形で、東西約1.3m、南北約2m、深さ2.6mを測る。埋土は灰褐色粘質土、黒色粘質土である。出土遺物には中世土師器、珠洲がある。

SE07は調査区北東寄り、X 4、Y 10に位置する。堀方は不定形で、東西1m、南北約80cm、深さは2.8mを測る。出土遺物には中世土師器がある。

SK01は調査区北東寄り、X 3～4、Y 9～10に位置する。東西方向に長い長方形を呈しており、南北1.9m、東西2.5m、深さは約30cmである。北東角にPI64を持つ。埋土は疊混じりの黒色土である。出土遺物には、中世土師器がある。

SK02・03は、調査区中央南寄り、X 2、Y 6～7に位置する。ともに梢円形を呈しており、東西約1m、南北90cm、深さは約18cmである。埋土は黄褐色土混じり黒褐色粘質土である。

SK05、SK 8～10は調査区北西側のX 3～5、Y 2～7に位置する。

(7) 8地区・遺物の概要 (第18・19図、図版13～15)

土師器、中世土師器、珠洲・甕、すり鉢、青磁・碗の小破片、白磁、越前・甕、瓦質土器・火鉢が出土した。以下、図化したものについて記述する。

50.51はSI01出土の中世土師器・皿である。50は口径10cm、器高2.1cm、底径は4cmを測る。51は底部であり、底径は4cmである。52～55は、SI02出土の中世土師器・皿である。52、53は口径9～11cm、器高2cm前後である。

56.57はSE02出土の中世土師器・皿である。ともにロクロ成形の回転糸切り底を持つ。口径12～12.4cm、底径4.4～5cm、器高は2.3～3cmを測る。口縁は真っ直ぐ外反し、56は端部を細く直立させている。58、59は珠洲である。58は甕の口縁部であり、断面は三角状を呈している。59はすり鉢であり、口縁内面には波状文がある。単目の単位は、判別できなかった。口縁端部は丸くおさめてあり、やや外反している。

60～65は中世土師器・皿である。60、61はSE05、62はSE06、63～65はSK01出土である。60はロクロ成形であり、口径8cm、底径4cm、器高2.3cmを測る。体部で二度屈曲し、口縁端部をつまみ出している。61は非ロクロ成形であり、口径は約9cmを測る。口縁端部を撫でている。62も同じく非ロクロ成形である。口径は9.5cmで、体部で大きく屈曲する。63、64は非ロクロ、65はロクロ成形である。63は口径9cm、緩く立ち上がる口縁の端部を屈曲させ、外につまみ出している。64は平坦な底面に緩く外反する口縁部を有する。口径は12.6cmである。65は口径10cmで、外反する口縁の端部を細くつまみ出している。

66～68は、SK04出土である。66は中世土師器・皿である。口径約8cmの非ロクロ成形である。口縁内外面を撫でている。67は珠洲・甕の口縁部である。口縁端部はくの字に屈曲し、断面形は丸い。68は珠洲・すり鉢の底部である。内面は摩滅し、単目の単位も判別できなかった。底径は15cmである。

69～79は、中世土師器である。69～71はSK05出土で、いずれも非ロクロ成形である。体部で屈曲し、口縁は緩く外反する。口径は13～14cmを測る。72～79は、SK08出土である。72～74はロクロ成形で、

口径8～9cm、器高2cm、底径4～5.5cmを測る。いずれも体部で一度ないし二度屈曲している。75～77は口径10～13cmを測り、前述の3点よりやや大きめとなるロクロ成形である。いずれも口縁端部を細くつまみ出している。78、79は非ロクロ成形である。口径11～12cmを測る。78は体部で屈曲する。

80、81はSK09出土である。80は中世土師器・皿で、口径は11cmである。81は珠洲・すり鉢の口縁部破片である。緩く外反し、端部でやや外に屈曲させている。口縁内面には波状文があり、端部は丸くおさめている。

82～88は、ピット出土の中世土師器・皿である。82はP1出土で、口径8cmを測る。83はP29出土の非ロクロ成形であり、口径は11.6cmを測る。内外面を撫でている。84はP44出土のロクロ成形である。口径8.4cm、底径4cm、器高2.2cmを測る。口縁はまっすぐ外反する。85はP109出土の底部である。底径は5cmであり、体部の立ち上がりは緩い。86はP136出土である。ロクロ成形で、口径10cm、底径4cm、器高2cmを測る。体部から口縁は緩く立ち上がり、端部は丸くおさめてある。87はP156出土である。口径8cmを測る。88はP163出土である。口径8cm、底径4cm、器高2.2cmを測る。

89、90は、包含層出土の珠洲である。89は珠洲の甕である。口縁端部の断面形は三角状で、体部は丸く外に広がる。90は珠洲・すり鉢である。口縁内面には波状文を施す。単目の単位は9条か。

(8) 9地区・遺構の概要（第12・13図、図版6・7）

9地区は、田面削平部分、排水路着工部分からなる。東西約38m、南北約13mの南西隅を欠いた形状の西側半分の箇所と、3m×27mの長方形、東側箇所から成る。東側は、耕土直下で地山が露出した。西側は、耕土、盛土、黒色粘土、黄色褐色粘土（地山）となる。Y0～2は地山が礫層まで削平され、Y3～10については谷部分にあたる。遺構は土坑2基、溝1条、ピット44基である。

SK01は調査区中央、X2～4、Y15～18に位置する。東西約3.4m、南北約2.2mの長方形を呈している。深さは20～40cmで、肩の立ち上がりはやや急で底面は平坦である。埋土は黒褐色粘質土で、灰色粘質土である。底面の地山は青灰色粘土である。出土遺物には、土師器小片がある。中世の堅穴状土杭と形態が似ているが、出土遺物からは詳細時期はわからなかった。

SD01は調査区中央、X0～4、Y14～19に位置する。調査区外南西から北東方向に伸びている。埴方は片側しか確認できず、全容はわからぬが幅は4m以上である。深さは30～40cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物には、近代の陶磁器があり、調査区南側の湧水地からの流れ込みと考えられる。

また調査区北東端で、掘立柱建物の柱穴と考えられるピットを1基確認した。直径約40cm、深さ50cmほどであった。埋土に柱痕らしきあともあったが、調査区内で同様のピットは他に全く無く、調査区の北東に建物は存在していたと考えられる。

(9) 9地区・遺物の概要（第19図、図版16）

縄文土器・深鉢、打製石斧、中世土師器、珠洲、青磁、唐津、土師質土器、砾石が出土している。縄文土器は、後期後半に属する。以下、図化したものについて記述する。

91～94は中世土師器・皿である。91は口径13cmを測り、体部で屈曲した口縁は外反し、外につまみ出している。92は口径9cmを測る。口縁は緩く立ち上がる。93は口縁が寝るように外に伸び、端部をつまみ出している。94は、口縁がほぼまっすぐに外反する。95、96は珠洲である。95はすり鉢の口縁部破片であり、口縁端部は面を取る。やや丸く外反している。96はSD01出土のすり鉢の底部である。単目の単位は13条である。

4. 德成Ⅱ遺跡9地区の概要

(1) 地形と層序 (第2・4図)

徳成Ⅱ遺跡9地区は104m²の田面削平部分である。試掘結果では、遺物包含層を2層確認し、比較的遺存状況はよいものと考えていたが、掘削したところ、削平し盛土を施した箇所が大半であった。地心の方によると、本調査区は昭和以前は宅地であったとの事で、削平はその宅地造成時のものと考えられる。

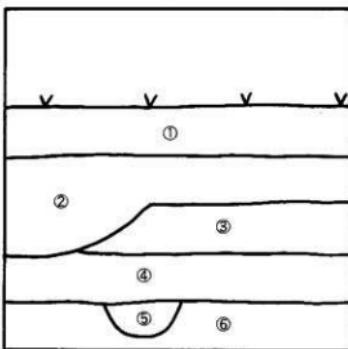
部分的に遺存していた箇所から、基本土層は1層目：耕作土、2層目：灰褐色土（盛土）、3層目：暗茶褐色粘質土（中世の遺物包含層）、4層目：黒褐色粘質土（古代の遺物包含層）、5層目：黄褐色粘質土（地山）となる。3層目、4層目を遺物包含層としたが、本調査区が所在する田面の試掘調査結果からであり、今回の調査では、遺物の出土量はごく少量であった。遺構の検出もごくわずかであり、地山上面から切り込んでいたものがほとんどであった。

(2) 9地区・遺構の概要 (第14図、図版8)

ピットを8基確認した。いずれも堀方20～50cmの楕円形を呈しており、深さは10～15cmである。遺構深度が浅いことから、上面はかなり削平を受けたようである。埋土は黒褐色粘質土であり、出土遺物は無い。埋土から中世期にあたると考えられるが、断定できない。P2は比較的しっかりしたピットであり、建物の柱穴の一部になりそうだが、やはり不明である。調査区の南側半分は、大々的に搅乱されており、木の根が一部遺存していた。

(3) 9地区・遺物の概要 (第19図、図版9)

須恵器、土師器、中世土師器、白磁、近代陶磁器が出土した。以下、図化したものについて記述する。
97は須恵器・蓋である。つまみと縁の間の胴部破片である。98は土師器・鉢の口縁部である。直径16cm、器高は3cm以上となる。99は土師器・椀の底部である。底径は6cmであり、回転糸切り底である。100、101は中世土師器・皿である。100は、口径7cm、器高1.4cmを測る。口縁は真っ直ぐに外反する。101は口縁部破片であり、外反させ端部を細くつまみ出している。102は白磁・碗である。口径19cmを測る。口縁端部は玉縁状におさめてある。12世紀後半にあたる。



第4図 徳成Ⅱ遺跡基本層序図

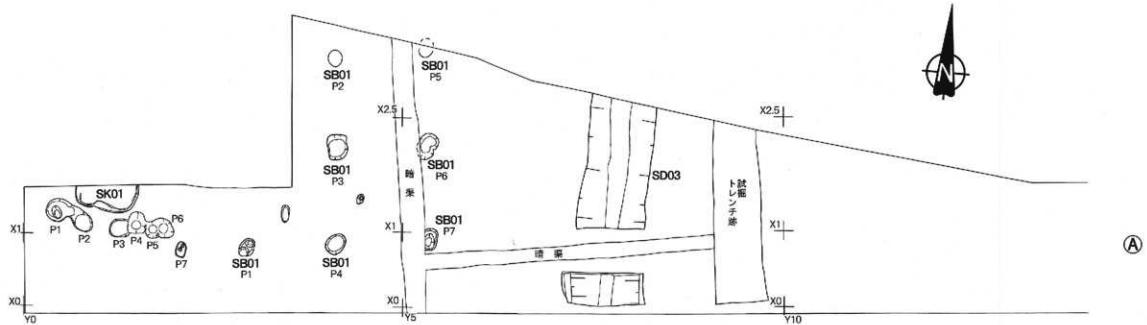
IV まとめ

- 東殿遺跡6地区は、調査区の西端で掘立柱建物1棟を検出した。遺物が出土していないため、詳細は不明であるが、柱穴の形状から13世紀以前のものと考えられる。またSD01、SD02、SD03は、溝の向きがほぼ同一であり、形状からも区画溝の一部であると考えられる。遺跡内における区画溝の配置は不明であり、跡跡の正確な位置についても今後の調査結果による。
- 東殿遺跡7地区は、明治8年の絵図に残る土塁跡があったと考えられる箇所の南側に近接している。

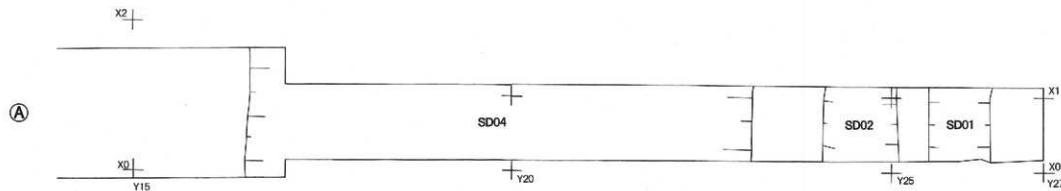
「殿」の地名、土塁跡付近には宗守寺屋敷遺跡のような館跡が存在していたという伝承や、地区の方に伝わっている「タチノアタマ」という古い地名からも、豪族の屋敷跡があった可能性は高い。今回の調査区では、14世紀後半から15世紀後半にあたる、区画溝と考えられる溝を確認したが、その他に関連する遺構は確認できなかった。調査区西側のピット群には、規則性を持って配列されたものはない。周辺の試掘結果からも、館跡の位置を特定できるデータは得られなかった。今後の調査結果に館跡の特定が待たれる。

3. 東殿遺跡8地区では、古代の整穴住居跡、中世の土坑、井戸、溝を確認した。古代の遺構は、現在の市道高畠城端栄町線の東側において、整穴住居跡、溝、土坑を確認していたが、今回の調査で遺跡の西側においても、古代の遺構の広がりを確認することとなった。中世遺構は、数基確認した土坑は徳成II遺跡8地区でも確認していた整穴状土坑と類似しており、仓库としての役割を果たしていたものと考えられる。井戸はすべて素掘りであったが、地山層が堅固であることから、枠などを設置する必要がなかつたと考えられる。
4. 東殿遺跡9地区は、16年度調査区の延長であり、中世の整穴状土坑とピットを数基、調査区の中央に谷部を確認した。遺跡の西端で、また徳成からの湧水の流れもあり、遺構の遺存状況は良好ではなかつた。集落の中心部からも外れており、また昭和30年代のは場整備で削平されている箇所もあることから、館跡との関連は考えられない。
5. 徳成II遺跡9地区は、調査区の大半が搅乱を受けており、ピット数基を検出したのみであった。南側で接する8地区的調査においても、南側から北側に遺構が希薄になっていくことを確認している。本調査区は遺跡の西端でもあり、集落の中心からも外れているものと考えられる。

- 参考文献 福光町教育委員会1980『富山県福光町竹林I遺跡緊急発掘調査概要』
福光町教育委員会1991『富山県福光町うずら山遺跡緊急発掘調査概要』
富山県埋蔵文化財センター 1991『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』
富山県文化振興財団1994『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』
富山県文化振興財団1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
福光町教育委員会2001『富山県福光町徳成II遺跡I』

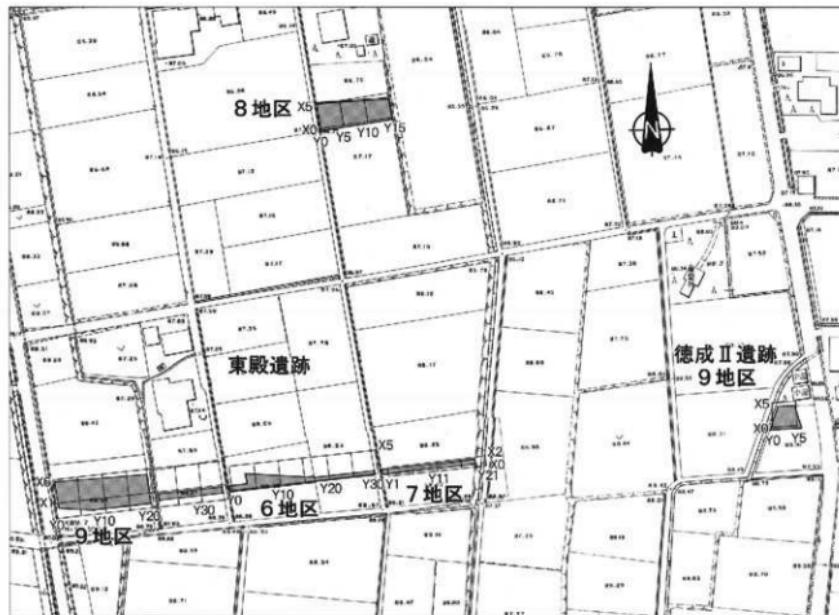


A

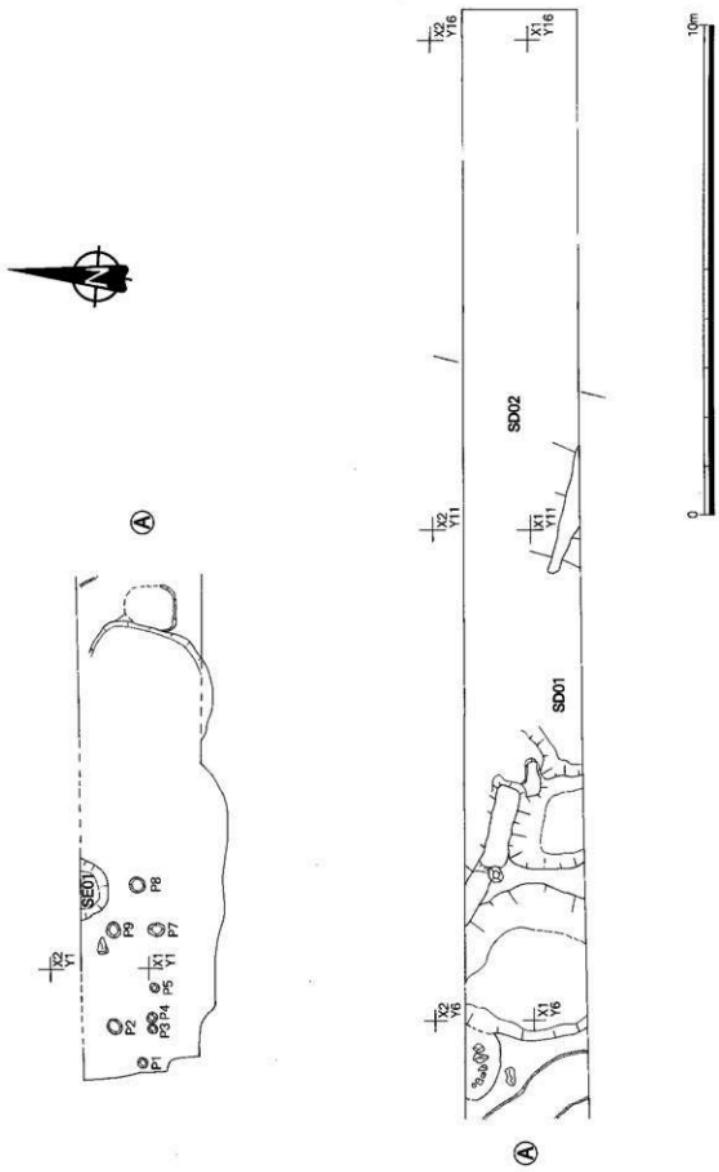


A

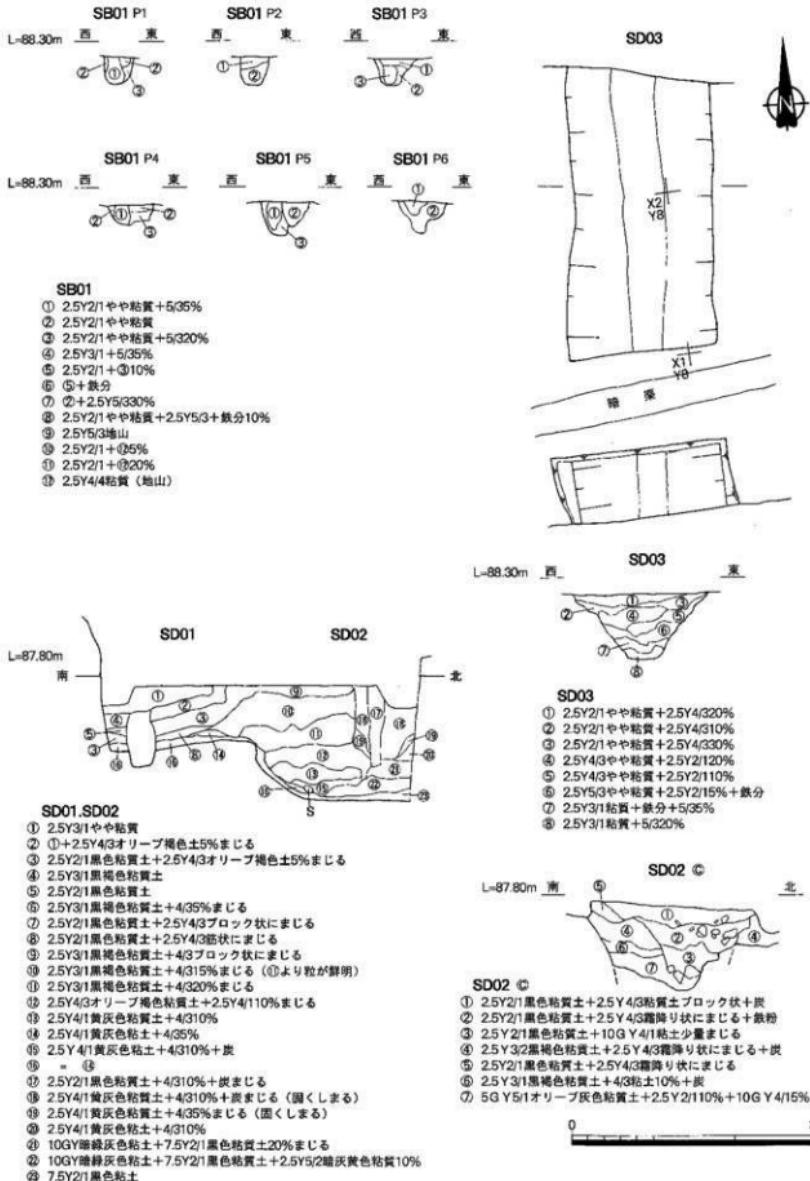
第5図 東殿遺跡6地区の造構平面図 (S=1:200)



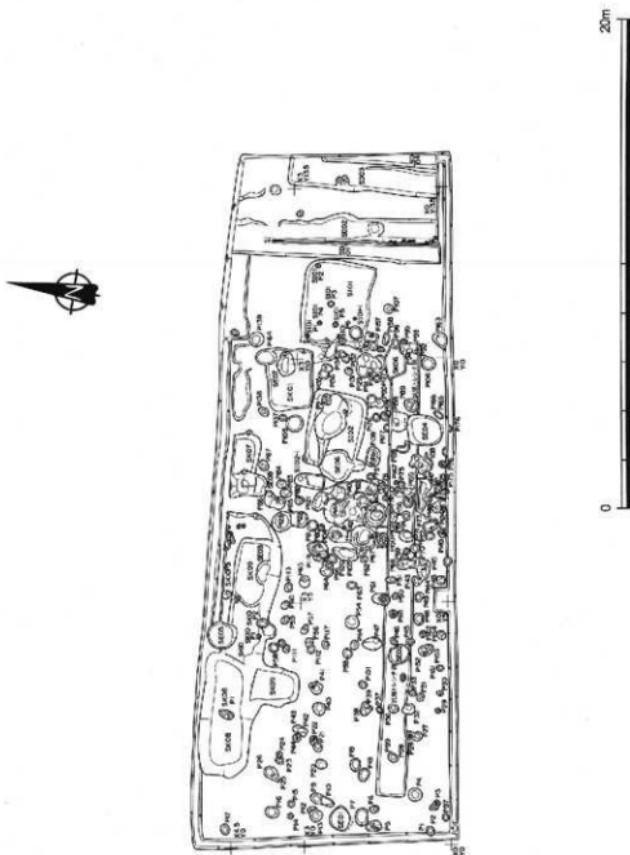
第6図 調査区割図 (S=1:2,000)



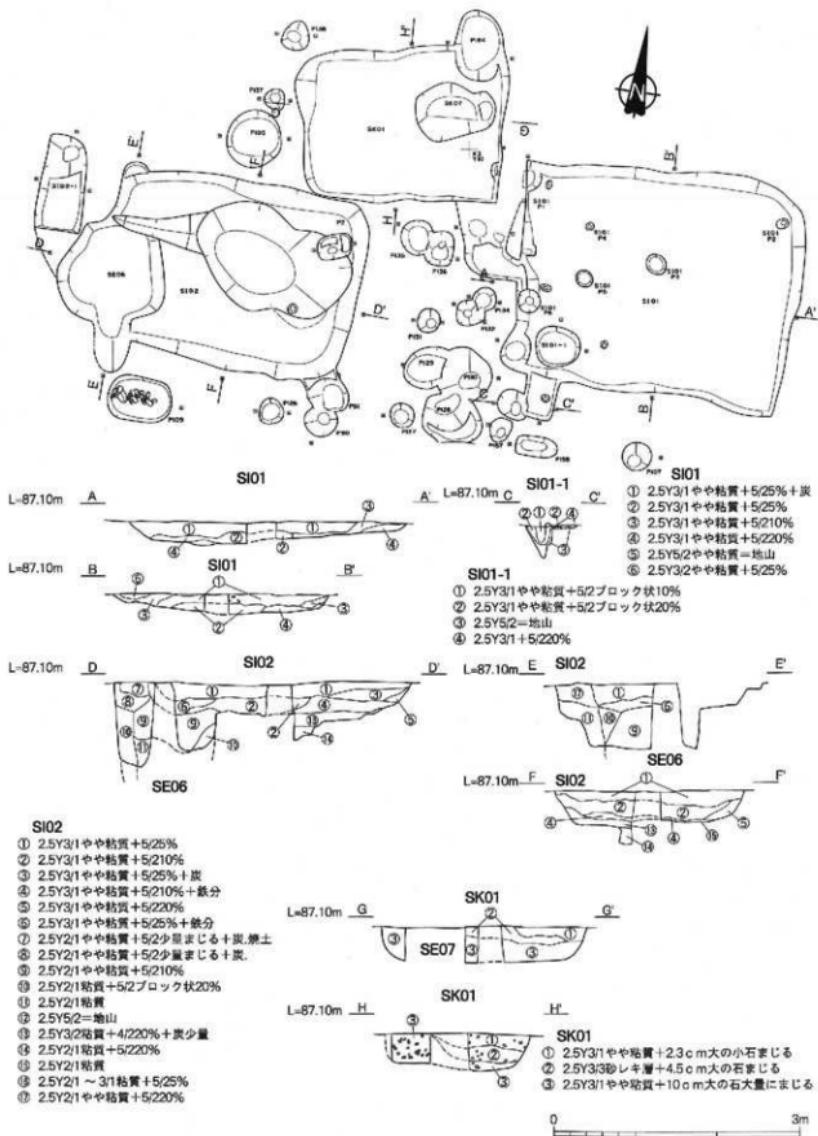
第7図 東段遺跡7地区の遺構平面図 (S=1:200)



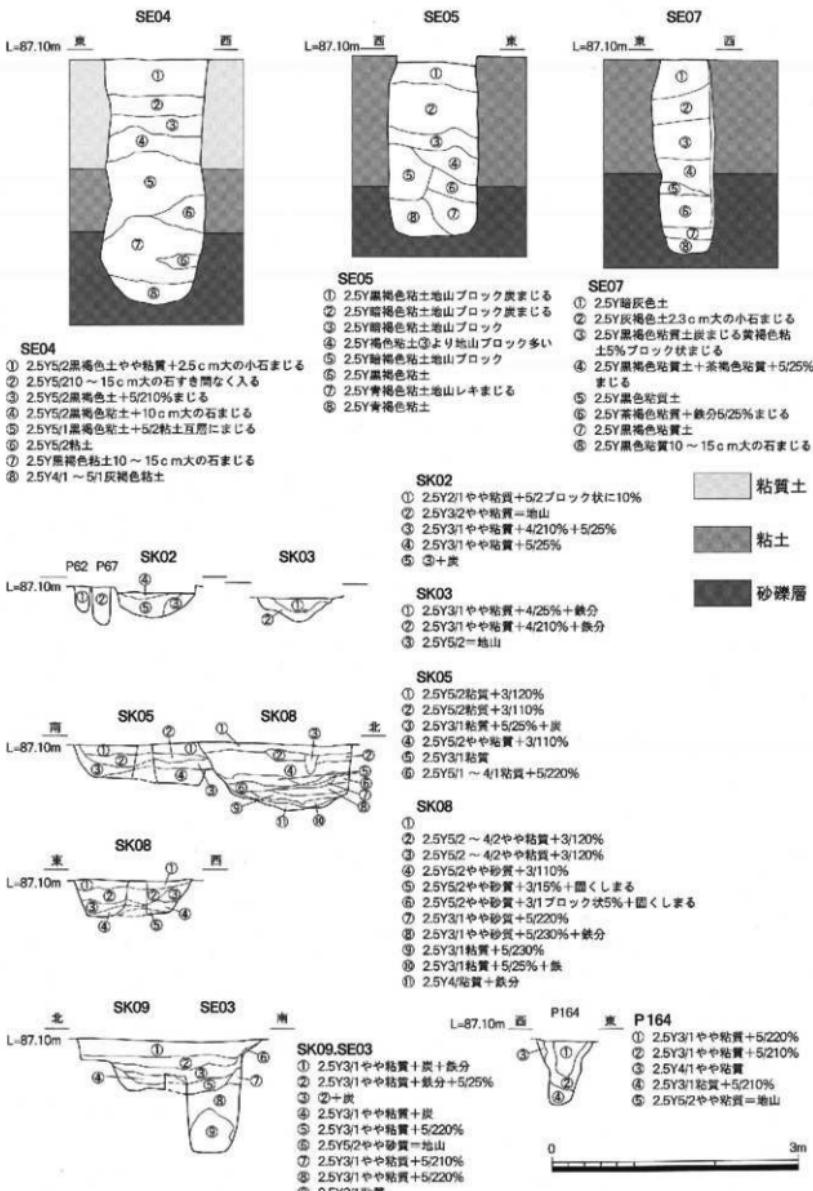
第8図 東殿遺跡6地区・7地区的遺構



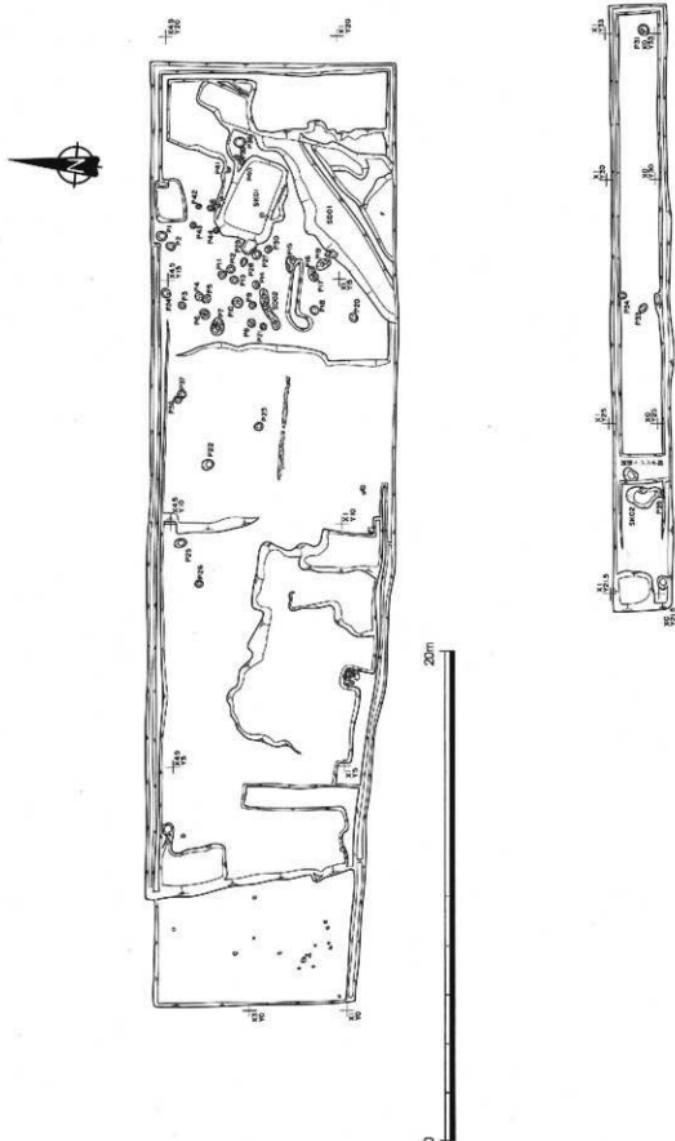
第9図 東殿遺跡8地区の遺構平面図



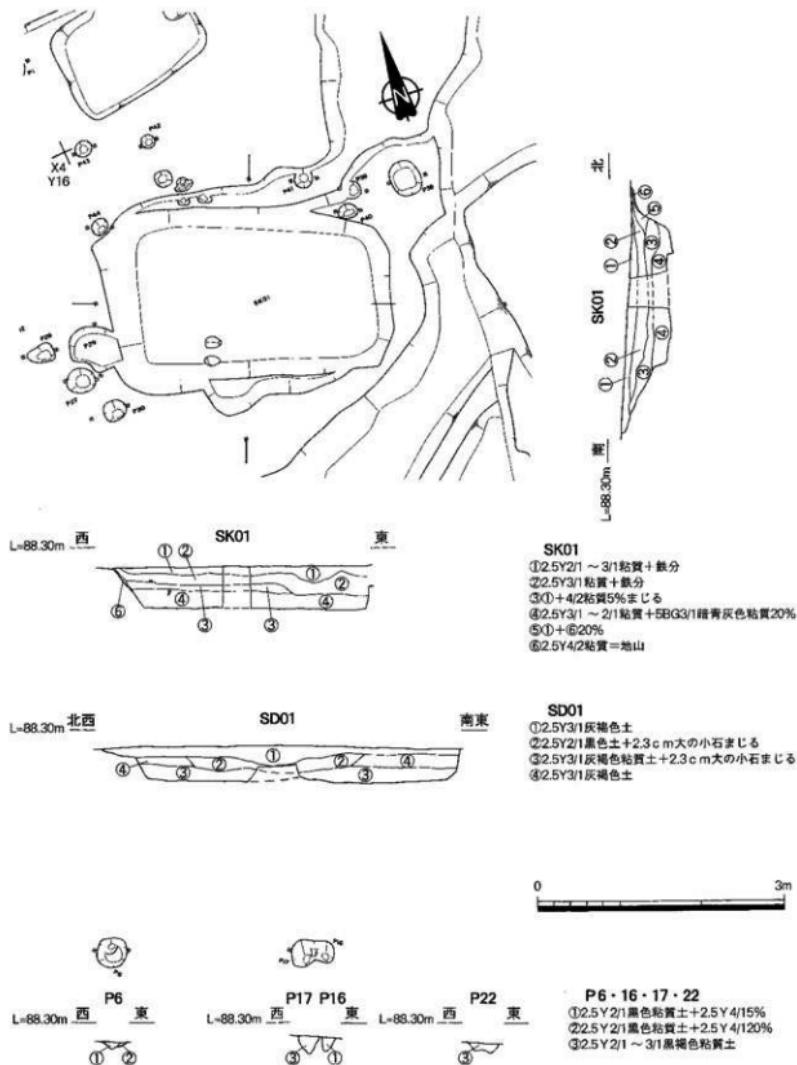
第10図 東殿遺跡8地区の遺構(1)



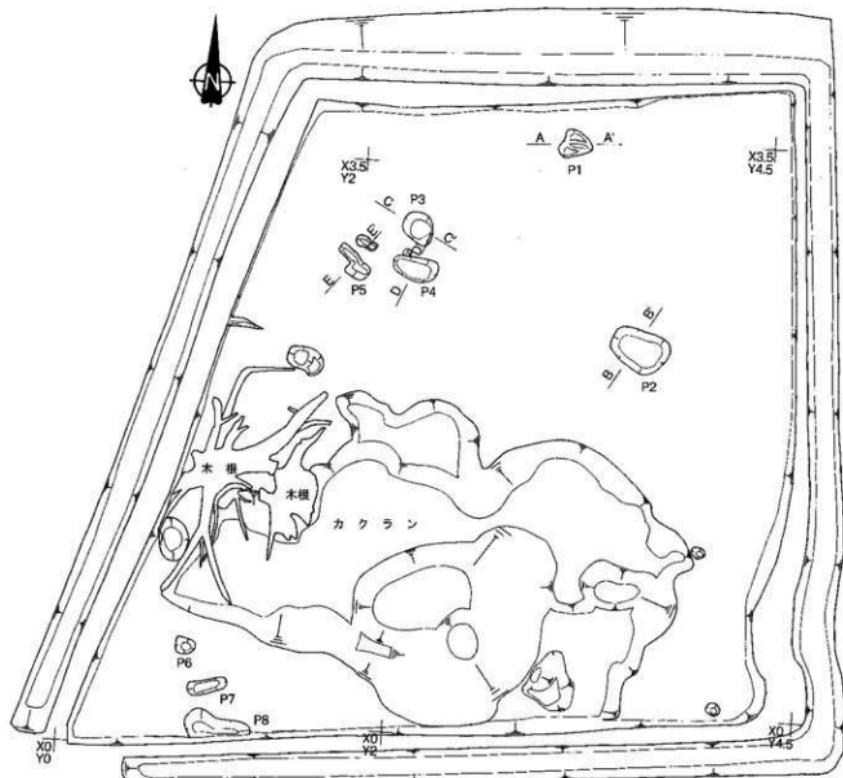
第11図 東殿遺跡8地区の遺構(2)



第12図 東殿遺跡9地区の遺構平面図



第13図 東殿遺跡9地区の遺構



P1,P3,P5
① 2.5Y2/1黒色土+5/25%

P2
① 2.5Y2/1黒色土(やや粘質)

P4
① 2.5Y5/1褐色粘質土
② 2.5Y4/2粘土=地山

L=89.00m A P1 A'
①

L=89.00m B P2 B'
①

L=89.00m C P3 C'
①

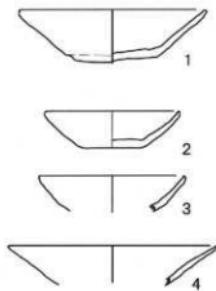
L=89.00m D P4 D'
①

L=89.00m E P5 E'
①

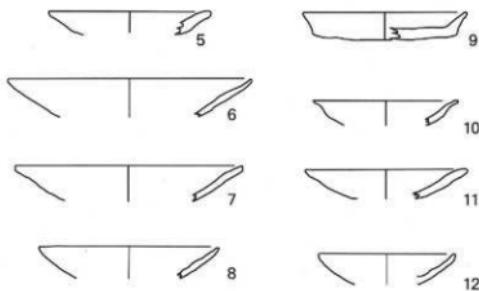
0 3m

第14図 德成Ⅱ遺跡の遺構

6地区
SD01
(1.5)

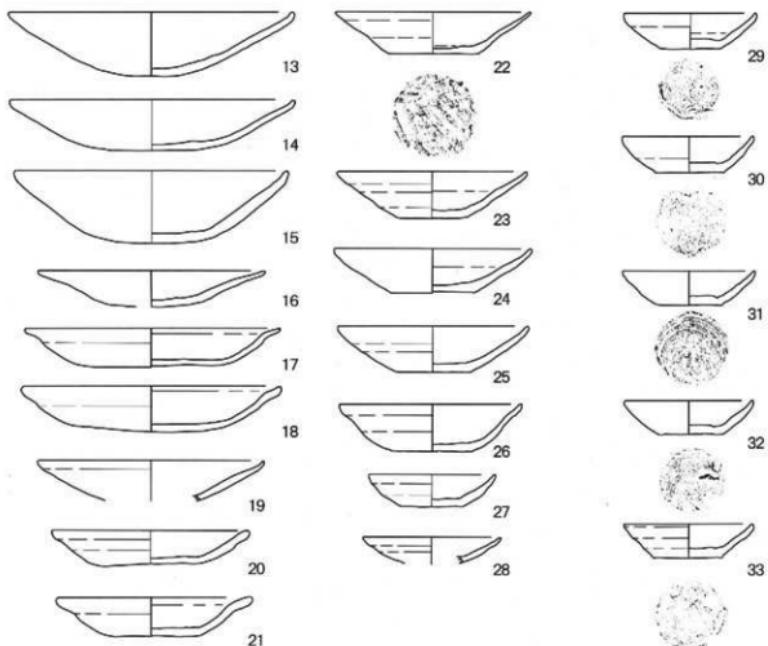


SD02(9)



0 15cm

7地区
SD02(13~33)



第15図 東殿遺跡6地区・7地区(1)の遺物 (S=1:3)

SD02(34,37~43)



34



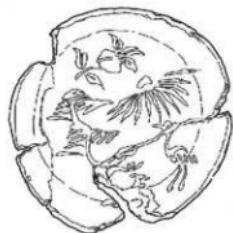
35



36

0

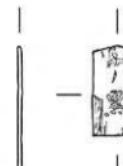
15cm



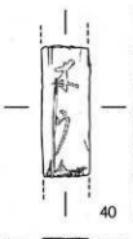
37



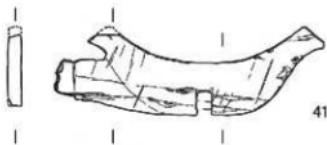
38



39



40



41



42

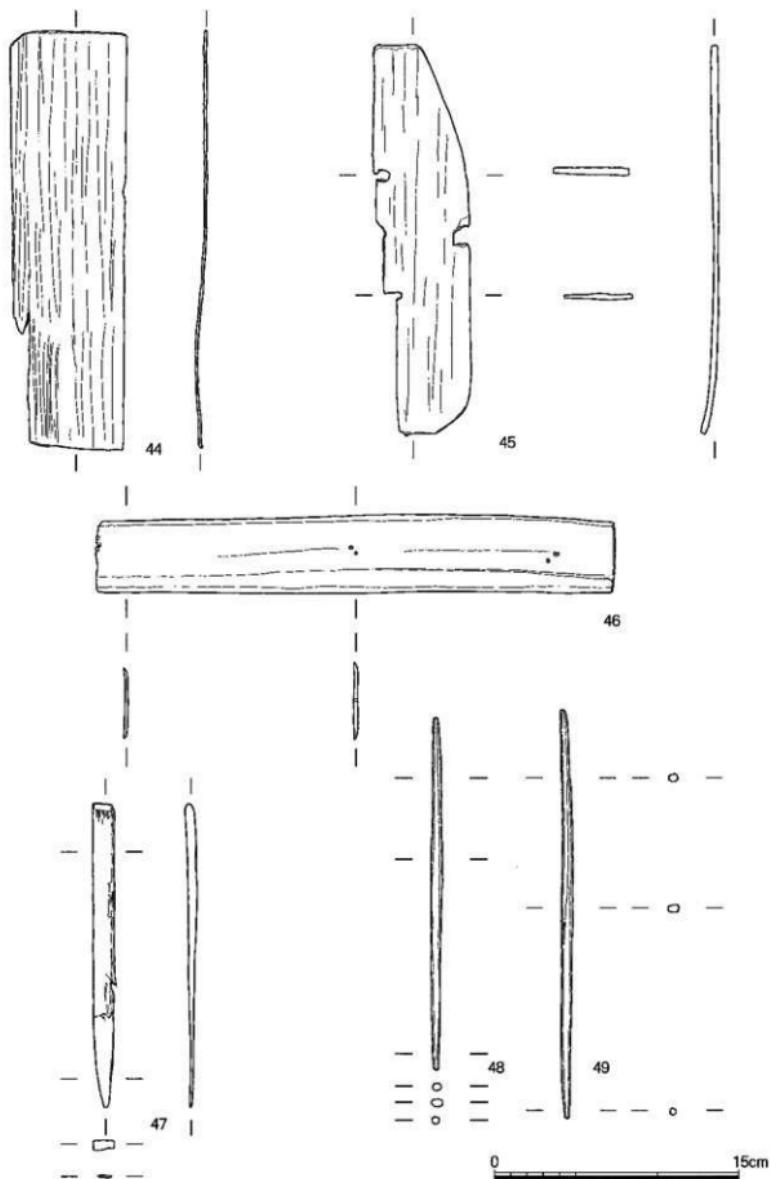


43

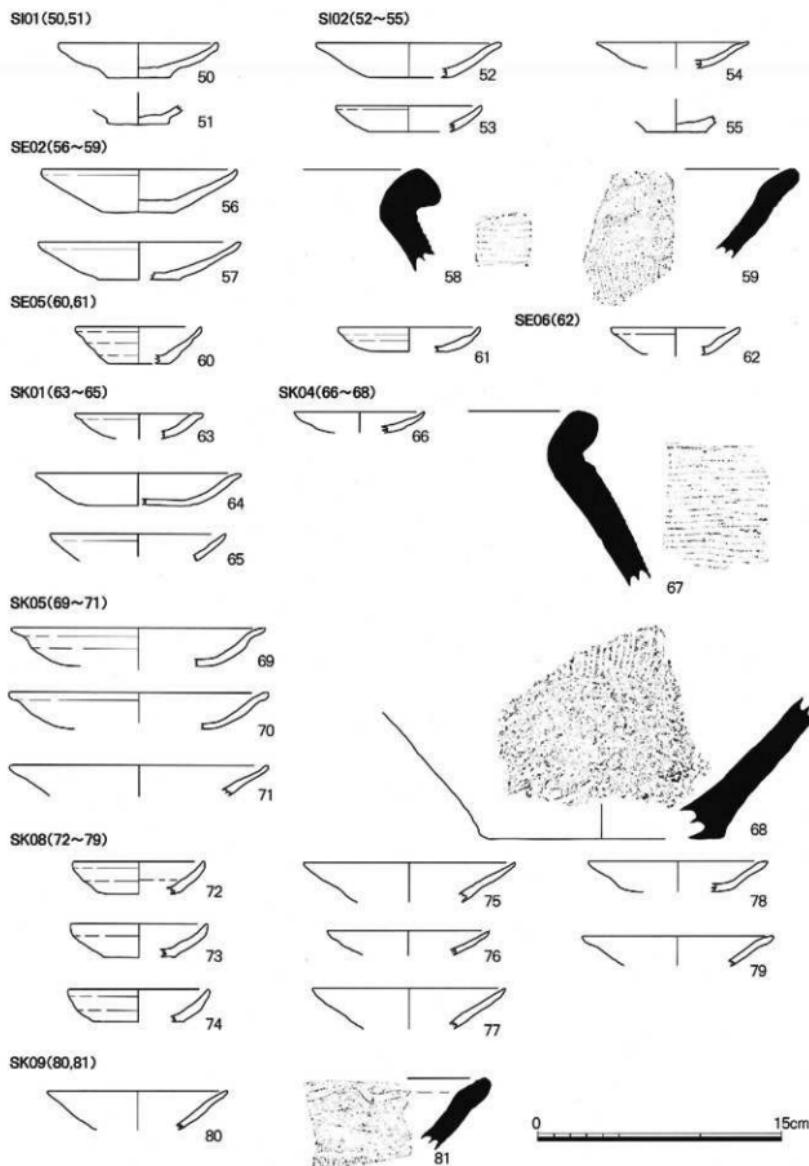
0

10cm

第16図 東殿遺跡7地区の遺物(2) 34~36 (S=1:3) 37~43 (S=1:2)

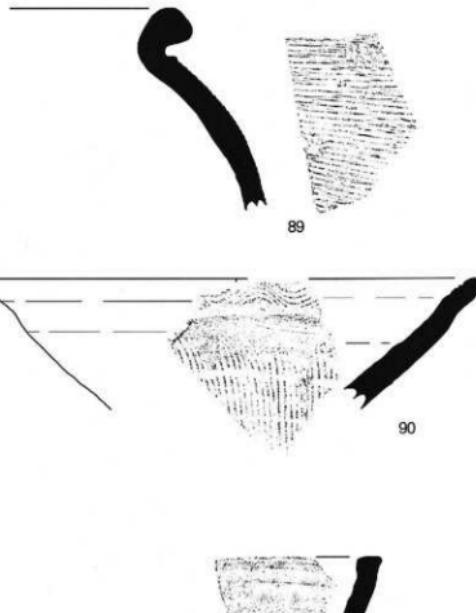
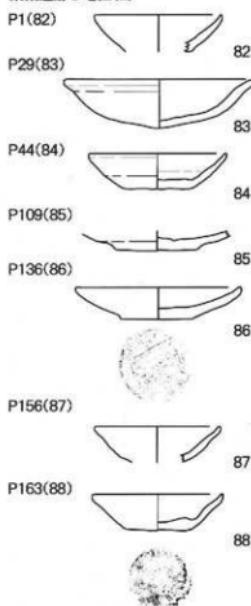


第17図 東殿遺跡7地区の遺物(3) (S=1 : 3)

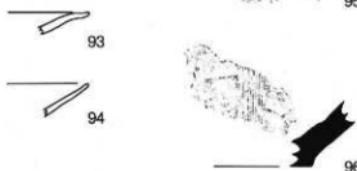
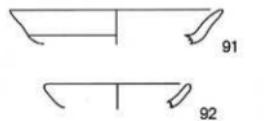


第18図 東殿遺跡8地区の遺物(1) (S=1:3)

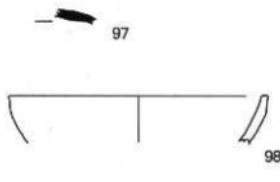
東殿遺跡 8 地区(2)



東殿遺跡 9 地区(91~96)

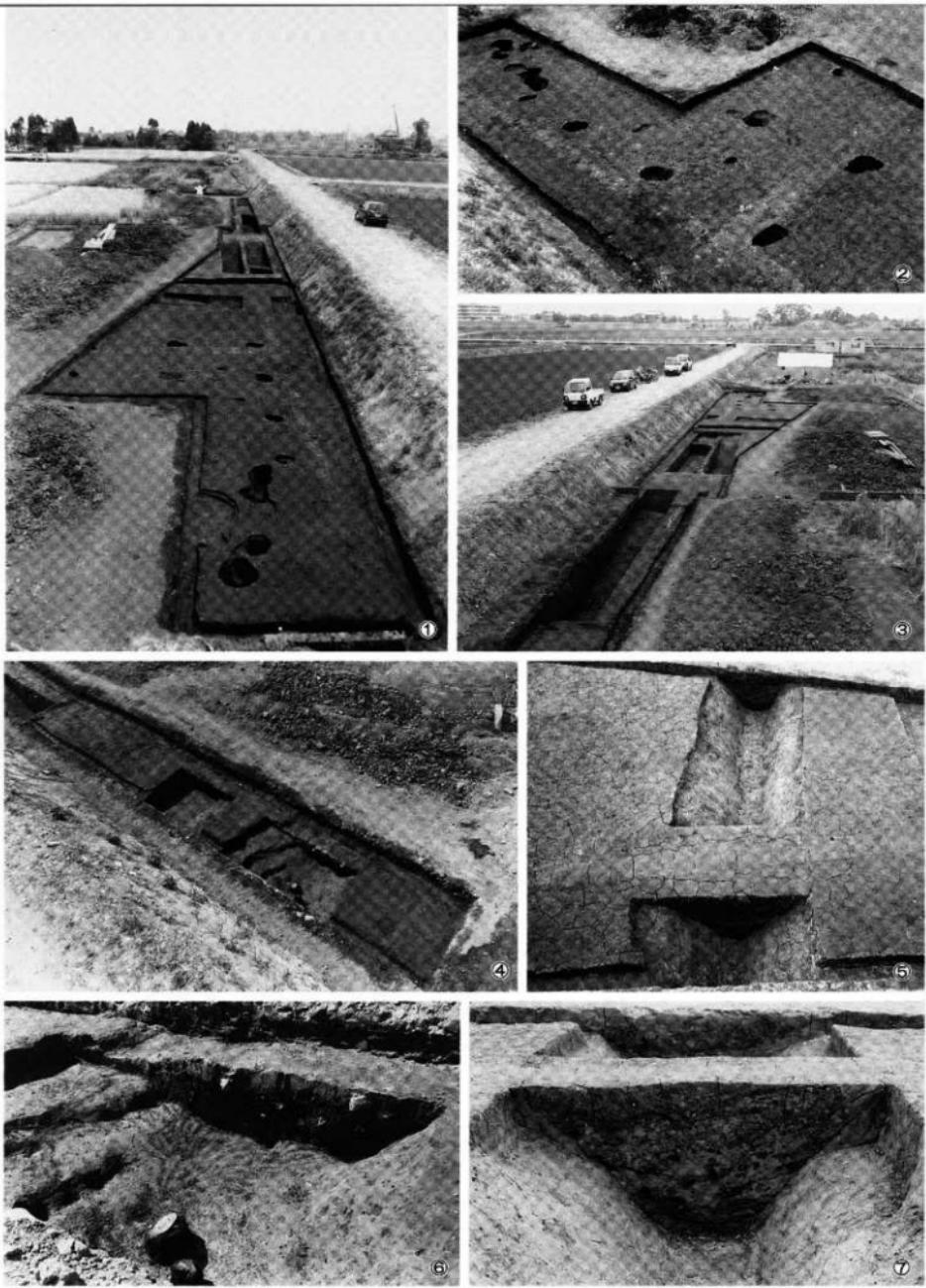


德成II遺跡 9 地区(97~102)



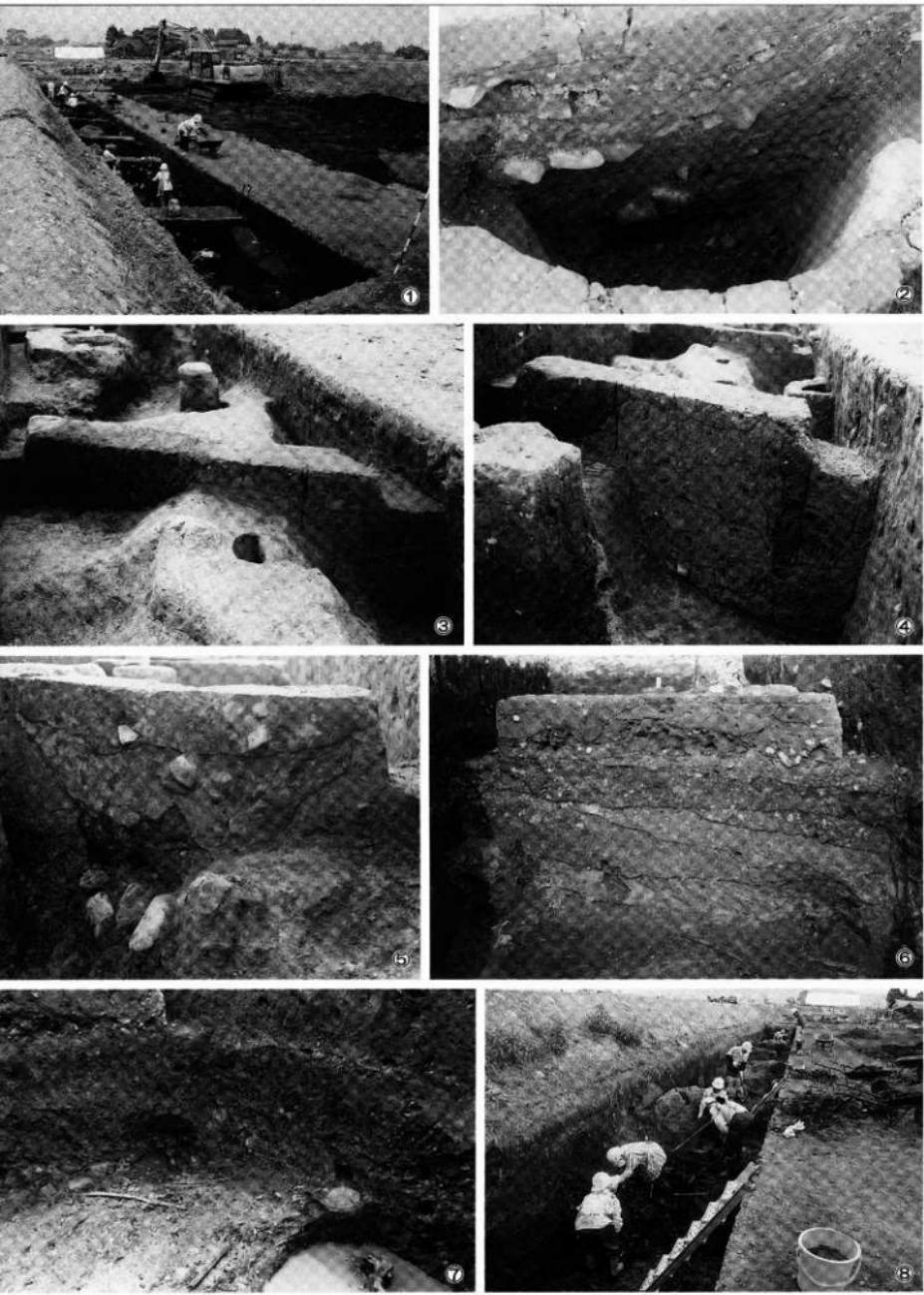
0 15cm

第19図 東殿遺跡 8 地区の遺物(2)・9 地区、徳成II遺跡 9 地区の遺物 (S=1 : 3)



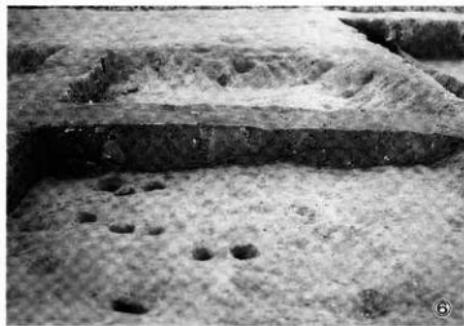
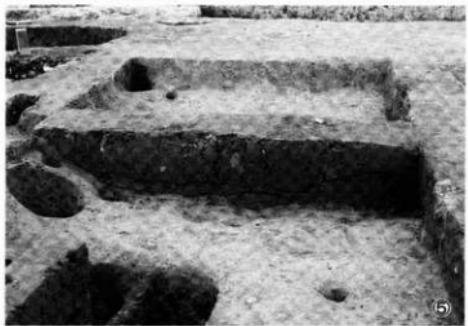
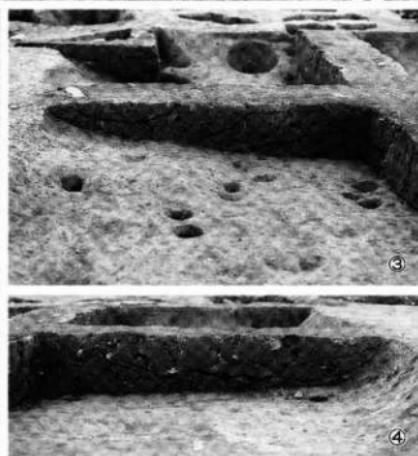
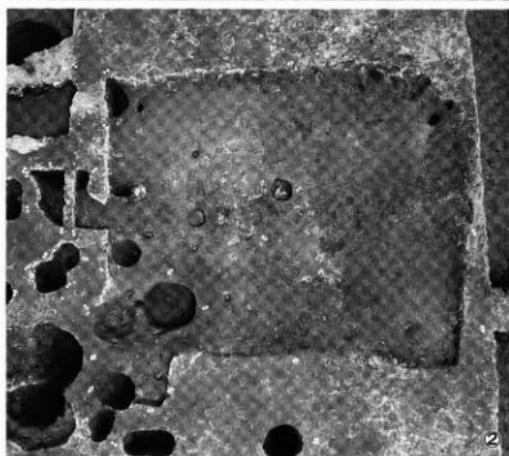
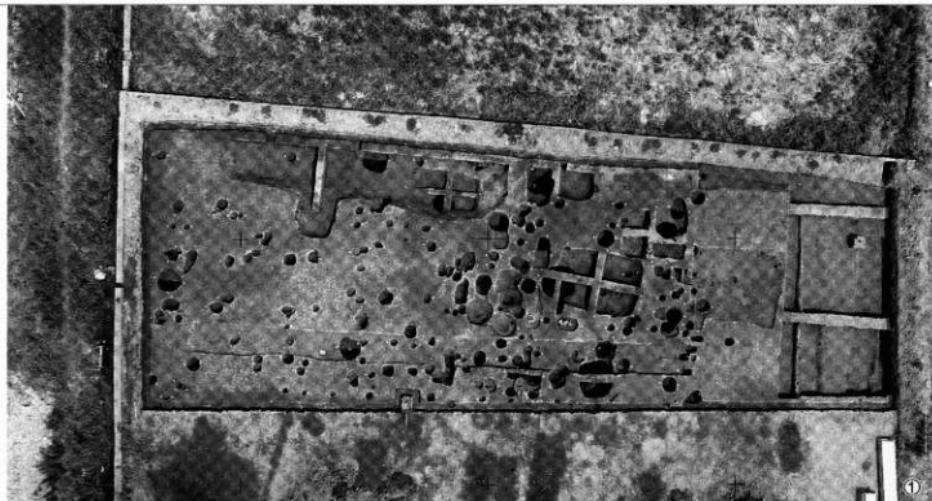
図版1 東殿遺跡6地区の遺構

1. 調査区全景（西から） 2. SB01（南西から） 3. YO-22（西から） 4. SD01・02（南西から）
5・7. SD03（南から） 6. SD01遺物出土状況



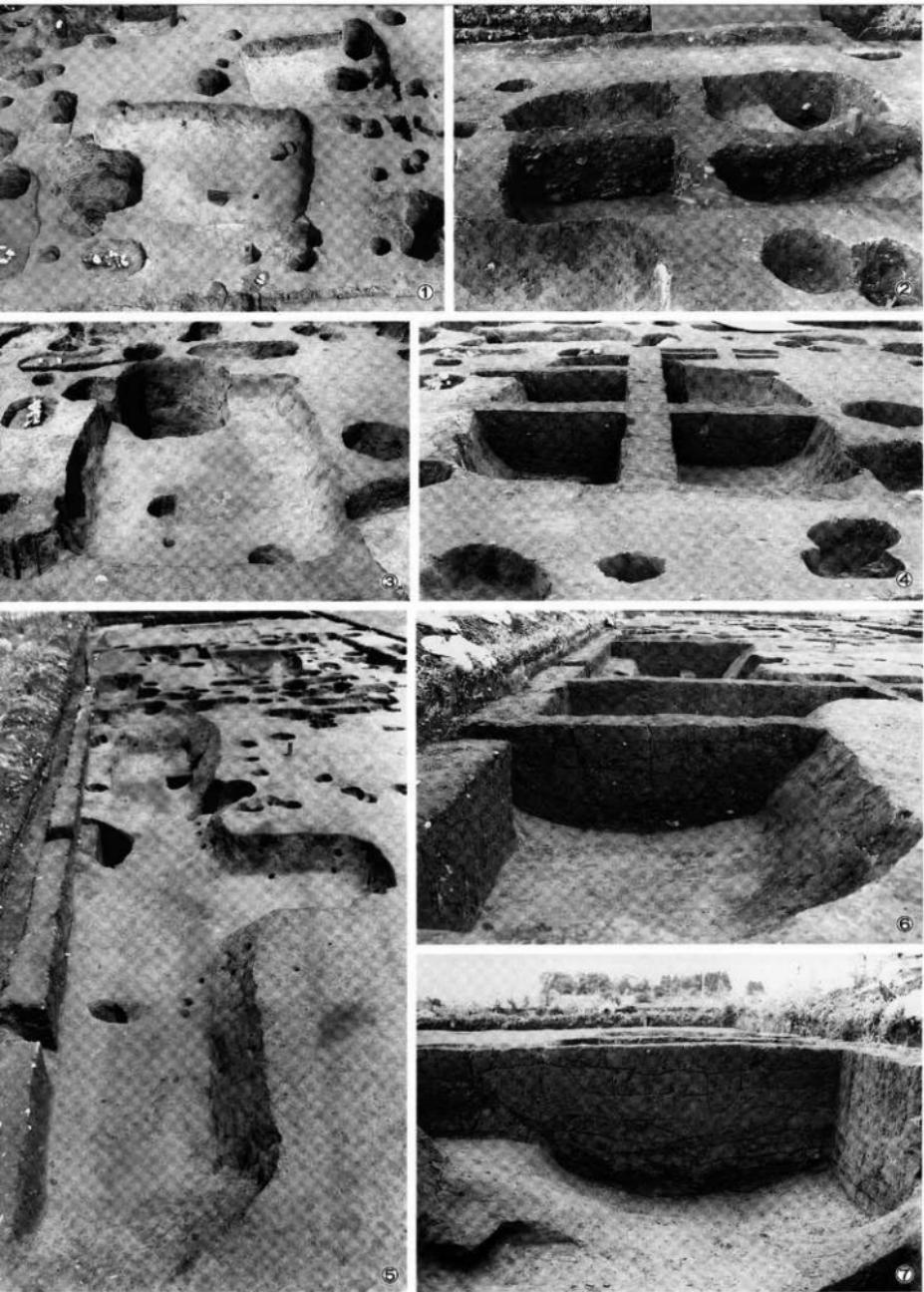
図版2 東殿跡7地区の遺構

- | | | | |
|---------------|---------------|-------------------|--------------|
| 1. 調査区全景（東から） | 2. SE01（南から） | 3・4. SD01・02（東から） | 5. SD02（東から） |
| 6. SD02（西から） | 7. SD02遺物出土状況 | 8. 作業状況 | |



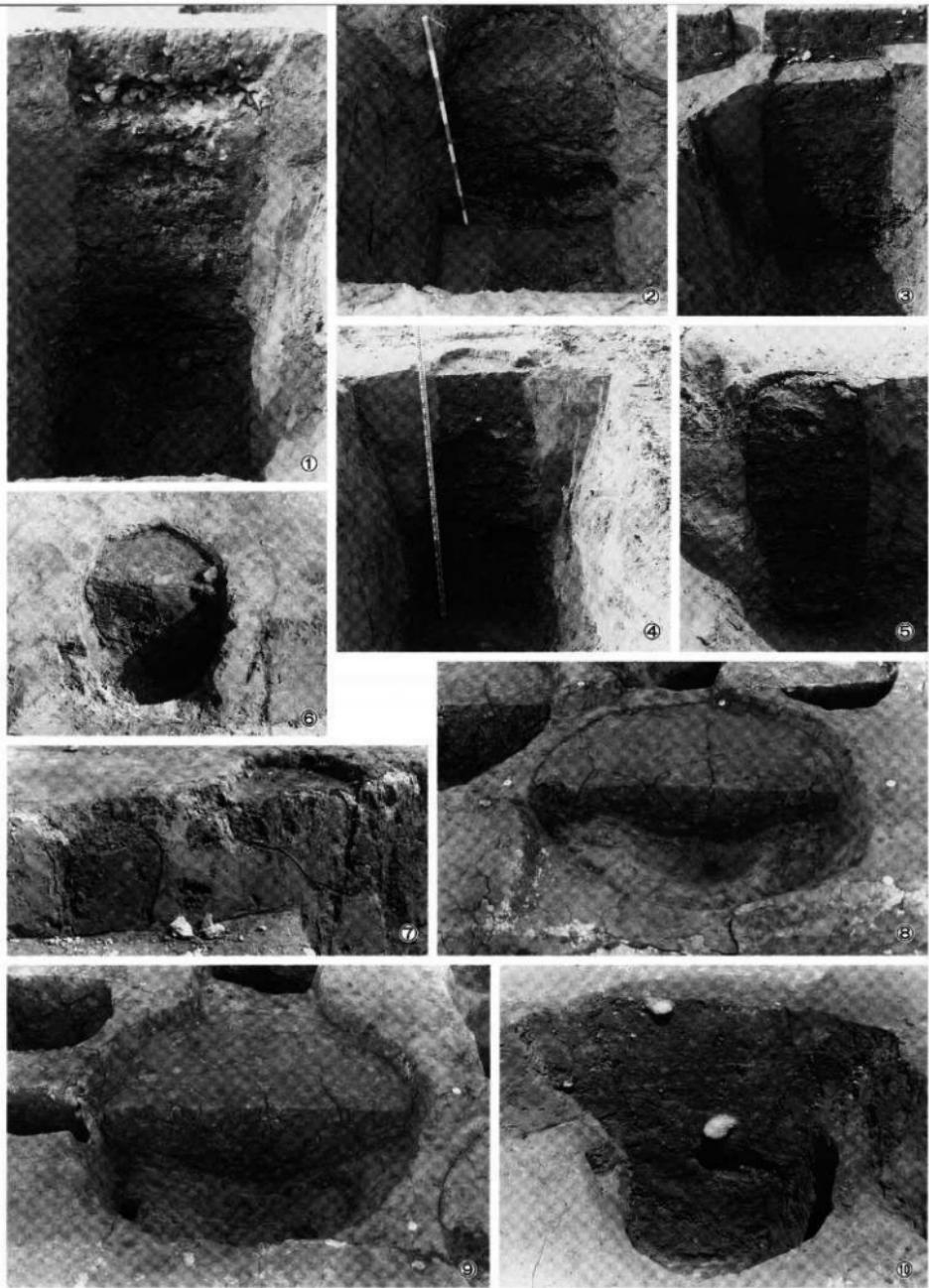
図版3 東殿遺跡8地区の遺構(1)

1. 調査区全景 2. SI01 (真上より) 3・4. SI01 (東から) 5・6. SI01 (南から)



図版4 東殿跡8地区の遺構(2)

- | | | |
|--------------------|---------------|------------------|
| 1. SI02・SK01 (南から) | 2. SK01 (南から) | 3・4. SI02 (東から) |
| 5. SK05、8～10 (西から) | 6. SK08 (西から) | 7. SK05・08 (東から) |



図版5 東殿遺跡8地区の遺構(3)

- | | | | | |
|---------------|-------------------|---------------|---------------|----------------|
| 1. SE04 (南から) | 2. SE01 (南から) | 3. SE05 (南から) | 4. SE02 (南から) | 5. SE07 (南から) |
| 6. P76 (南から) | 7. P177・178 (南から) | 8. SK03 (南から) | 9. SK02 (南から) | 10. P164 (南から) |



①



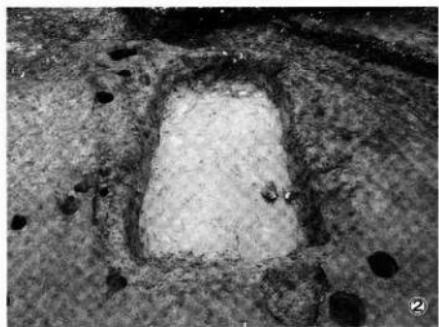
③

図版6 東殿遺跡9地区の遺構(1)

1. 調査区遠景（東から） 2. Y0～20部分（真上から） 3. Y21～34部分（西から）



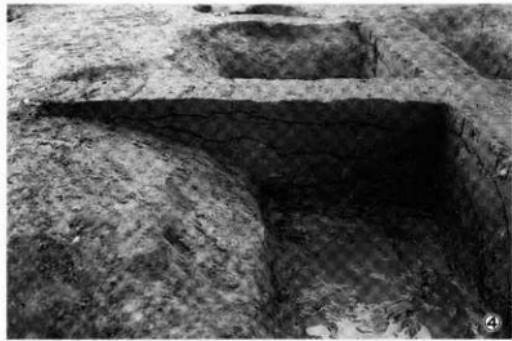
①



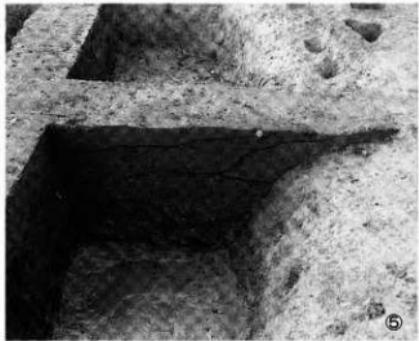
②



③



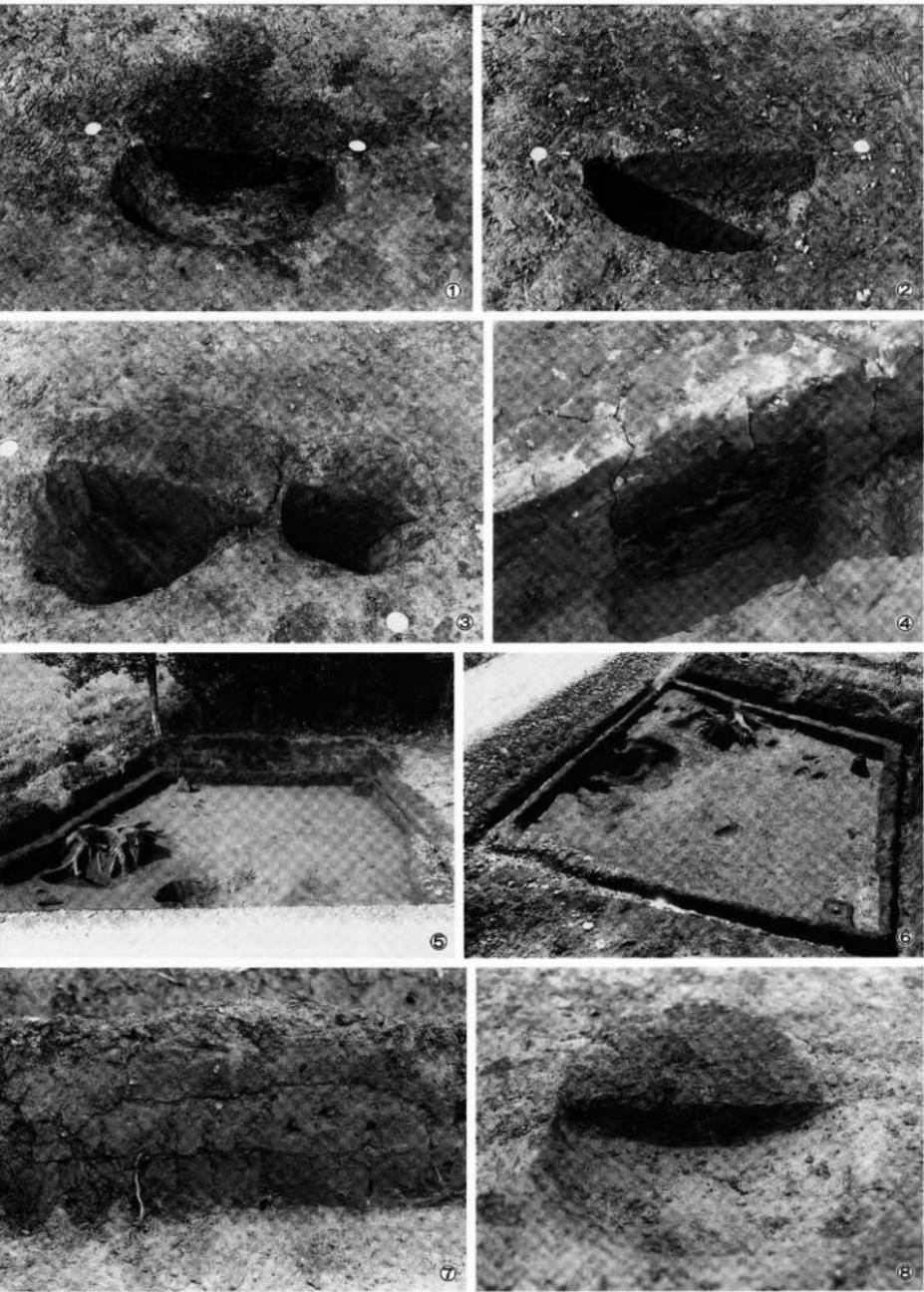
④



⑤

図版7 東殿遺跡9地区の遺構(2)

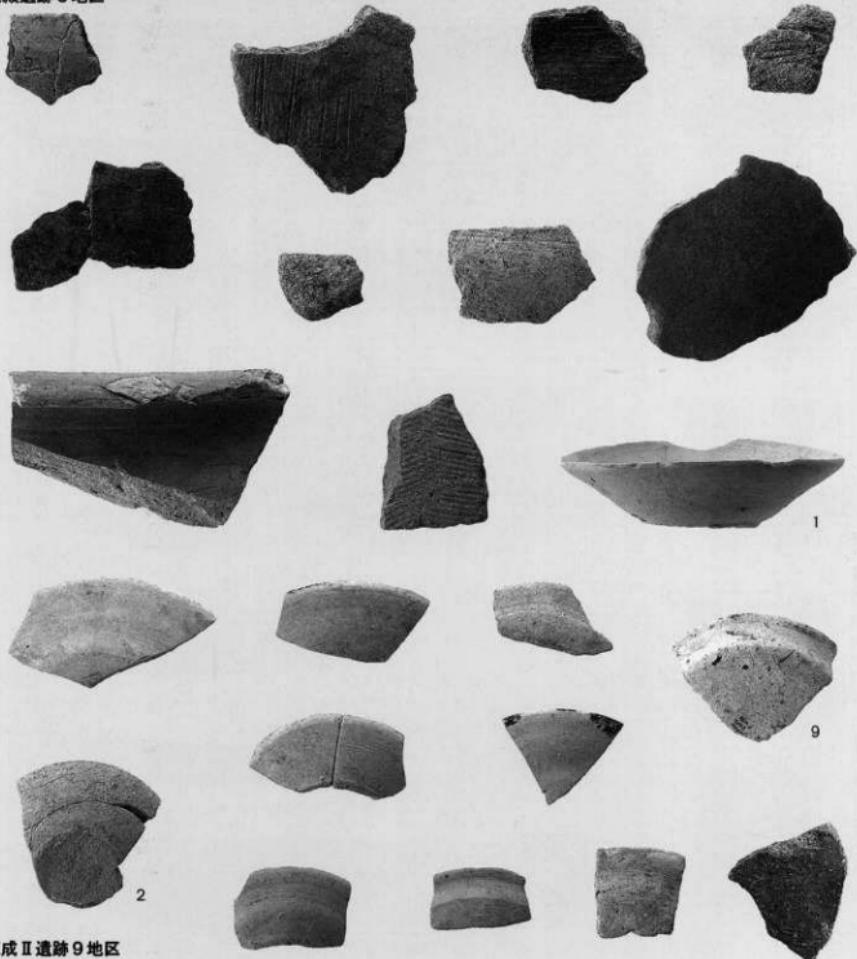
1. X0～5、Y11～19部分（南から） 2. SK01（北西から） 3. SD01（南西から） 4・5. SK01（南東から）



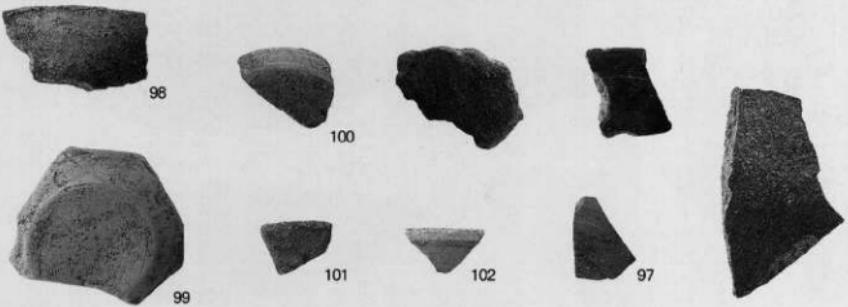
図版8 東殿遺跡9地区(3)・徳成II遺跡9地区の遺構

- | | | | |
|----------------|----------------|-----------------|--------------|
| 1. P6 (南から) | 2. P22 (南から) | 3. P16・17 (南から) | 4. P32 (南から) |
| 5. 調査区全景 (南から) | 6. 調査区全景 (東から) | 7. 基本土層 (南から) | 8. P2 (南東から) |
- ※1~4東殿、5~8徳成II

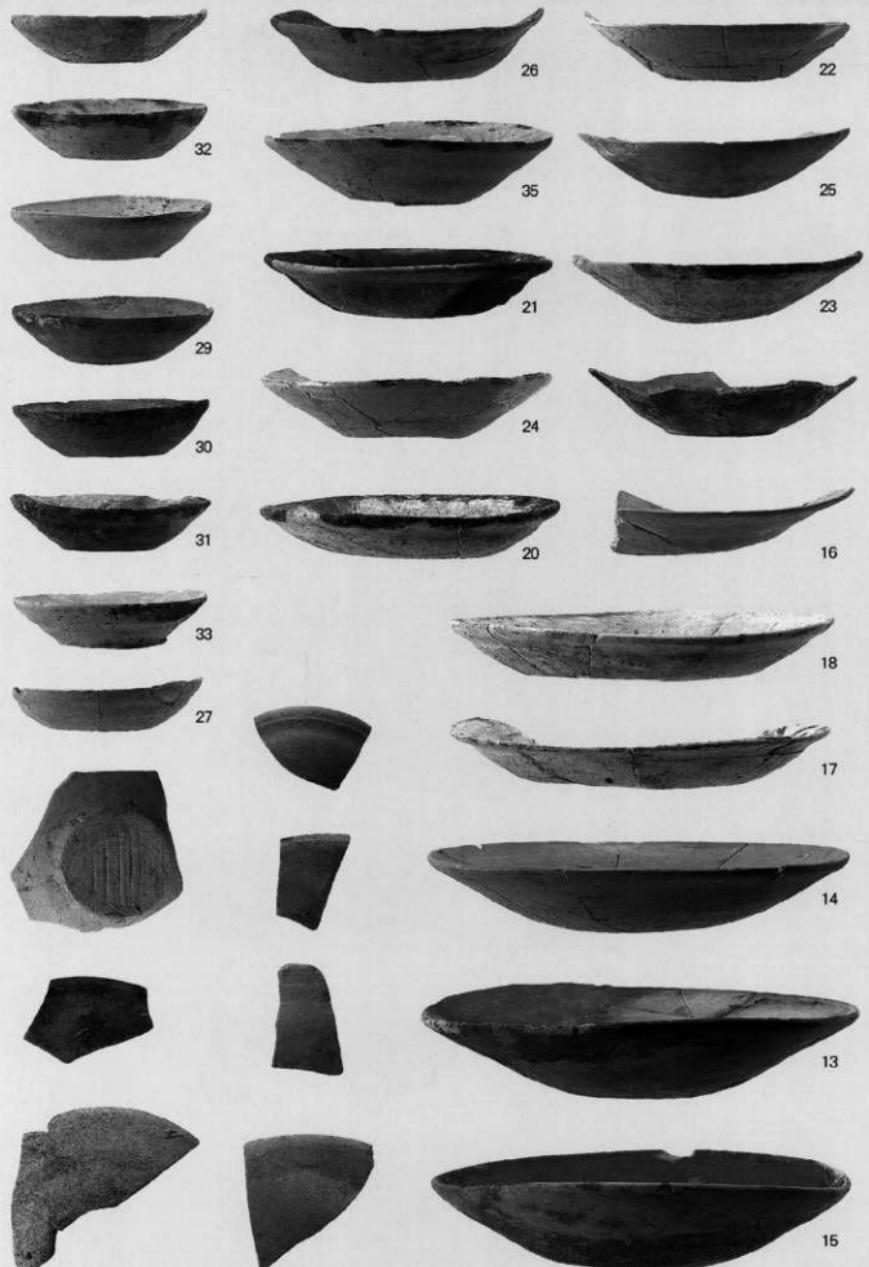
東殿遺跡 6 地区



德成 II 遺跡 9 地区



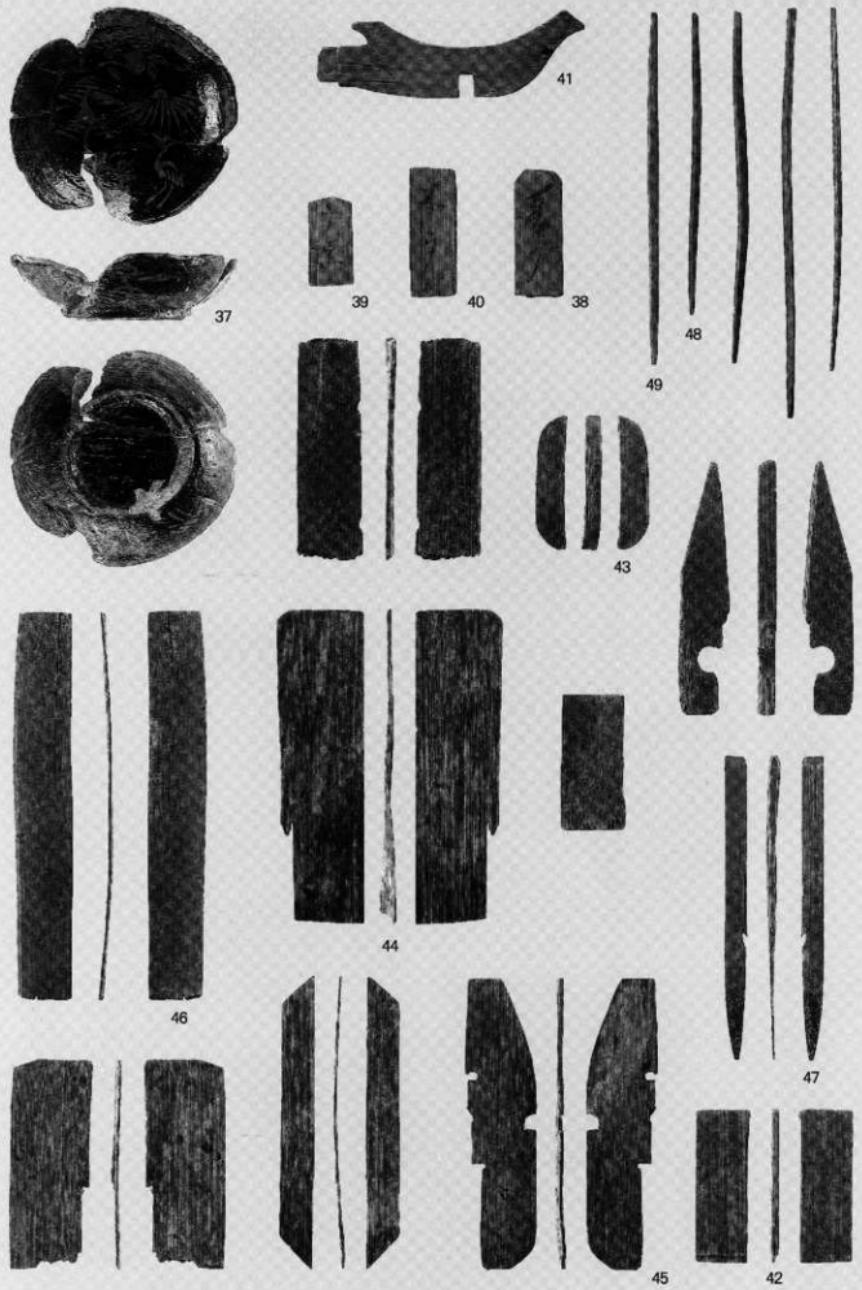
図版 9 東殿遺跡 6 地区・徳成 II 遺跡 9 地区の遺物



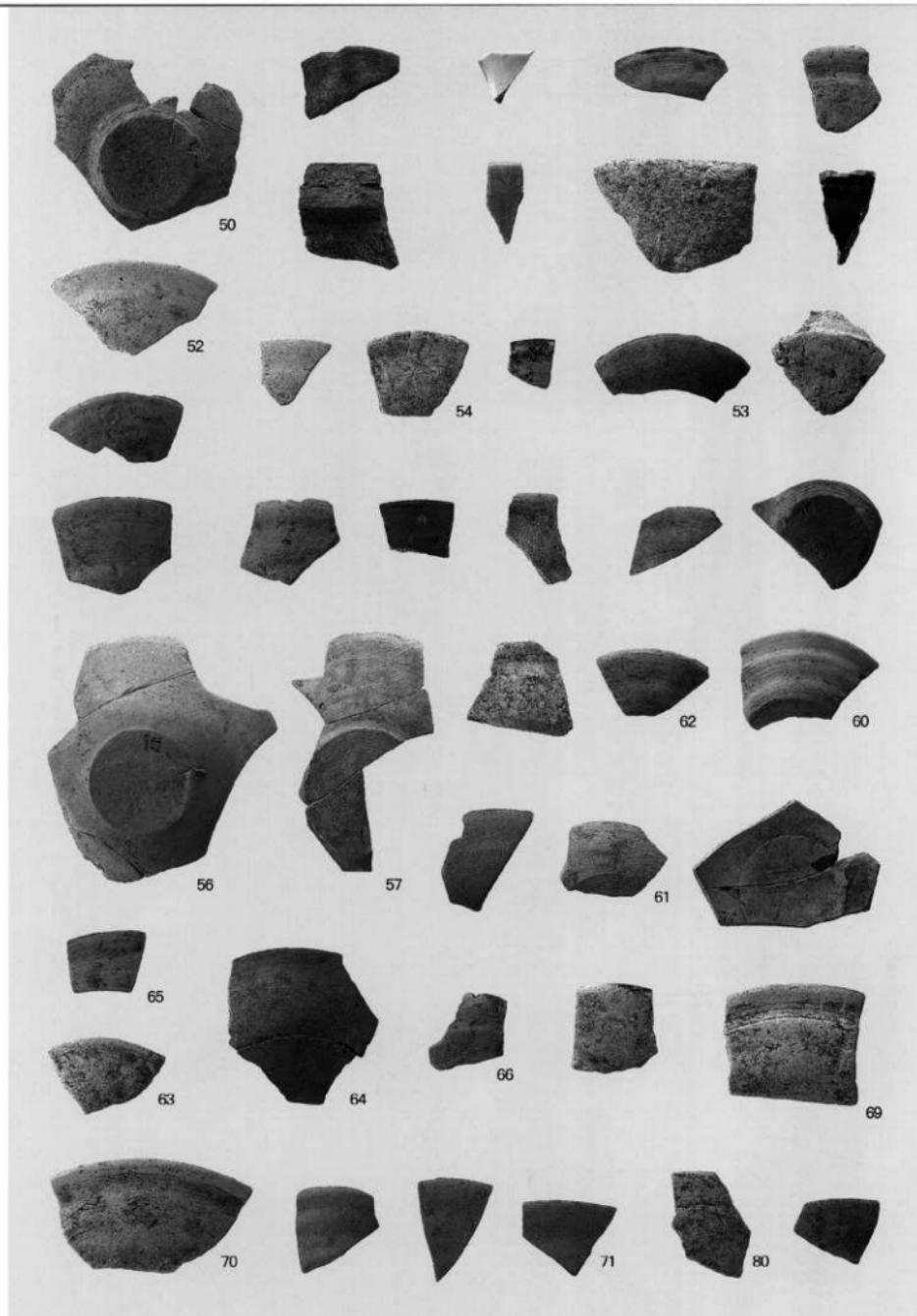
図版10 東殿遺跡 7 地区の遺物(1)



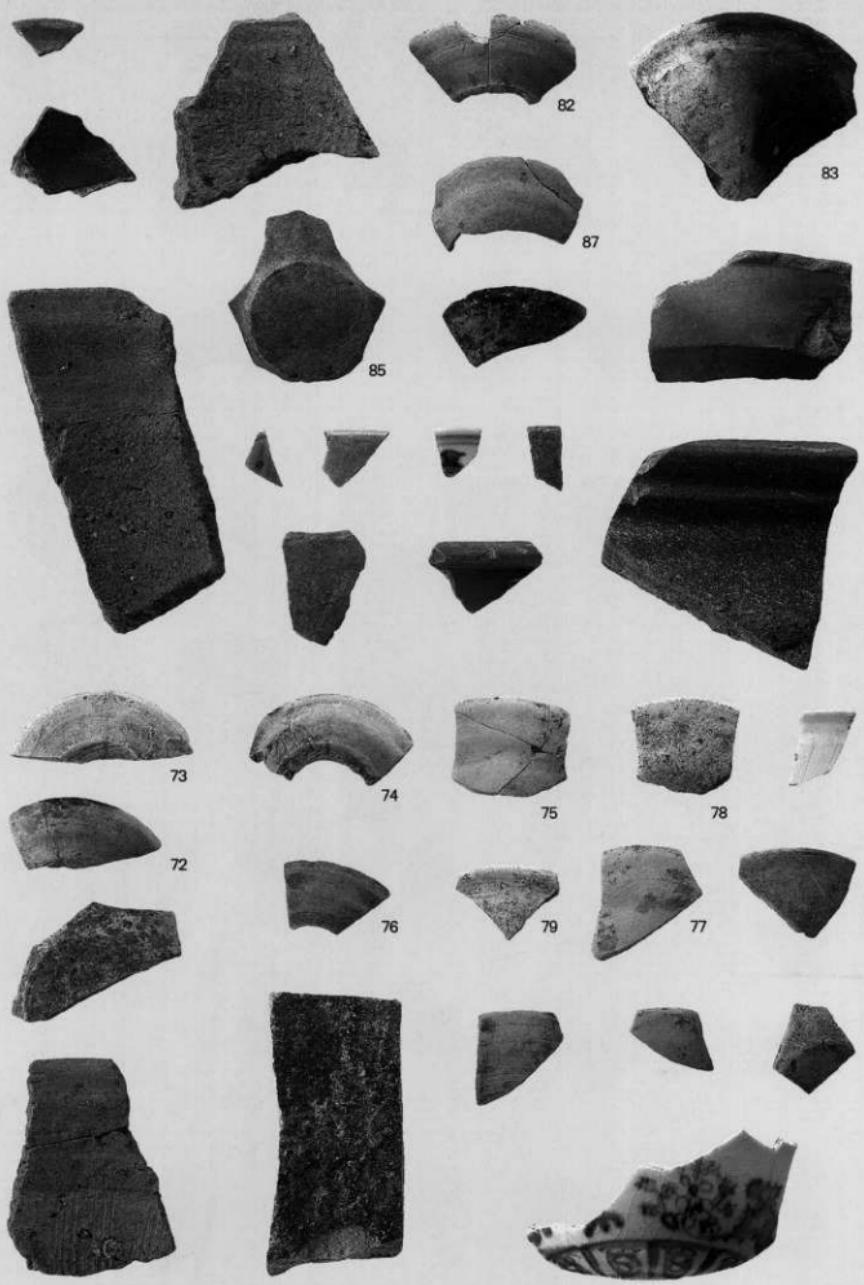
図版11 東殿遺跡7地区の遺物(2)



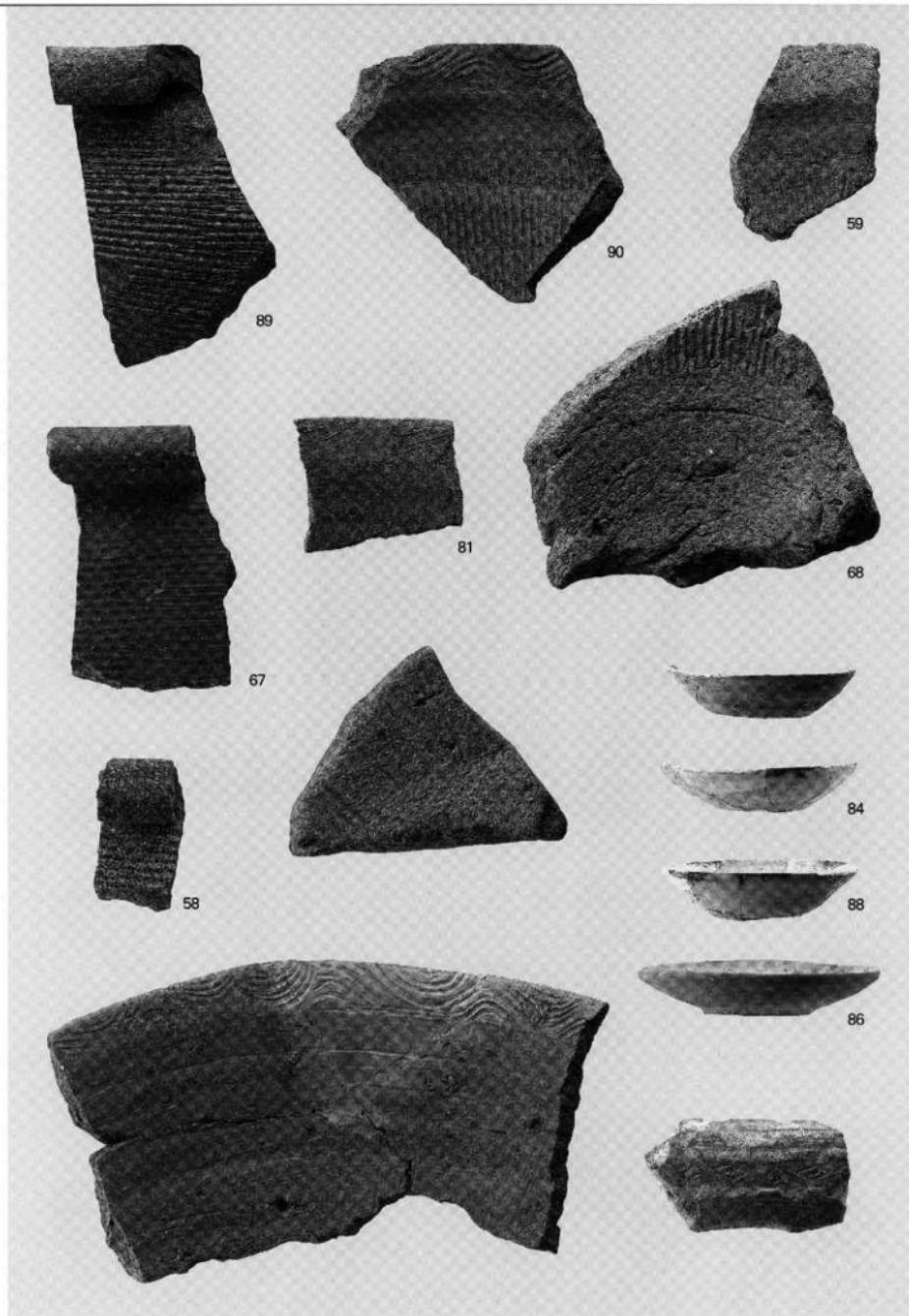
図版12 東殿遺跡7地区の遺物(3)



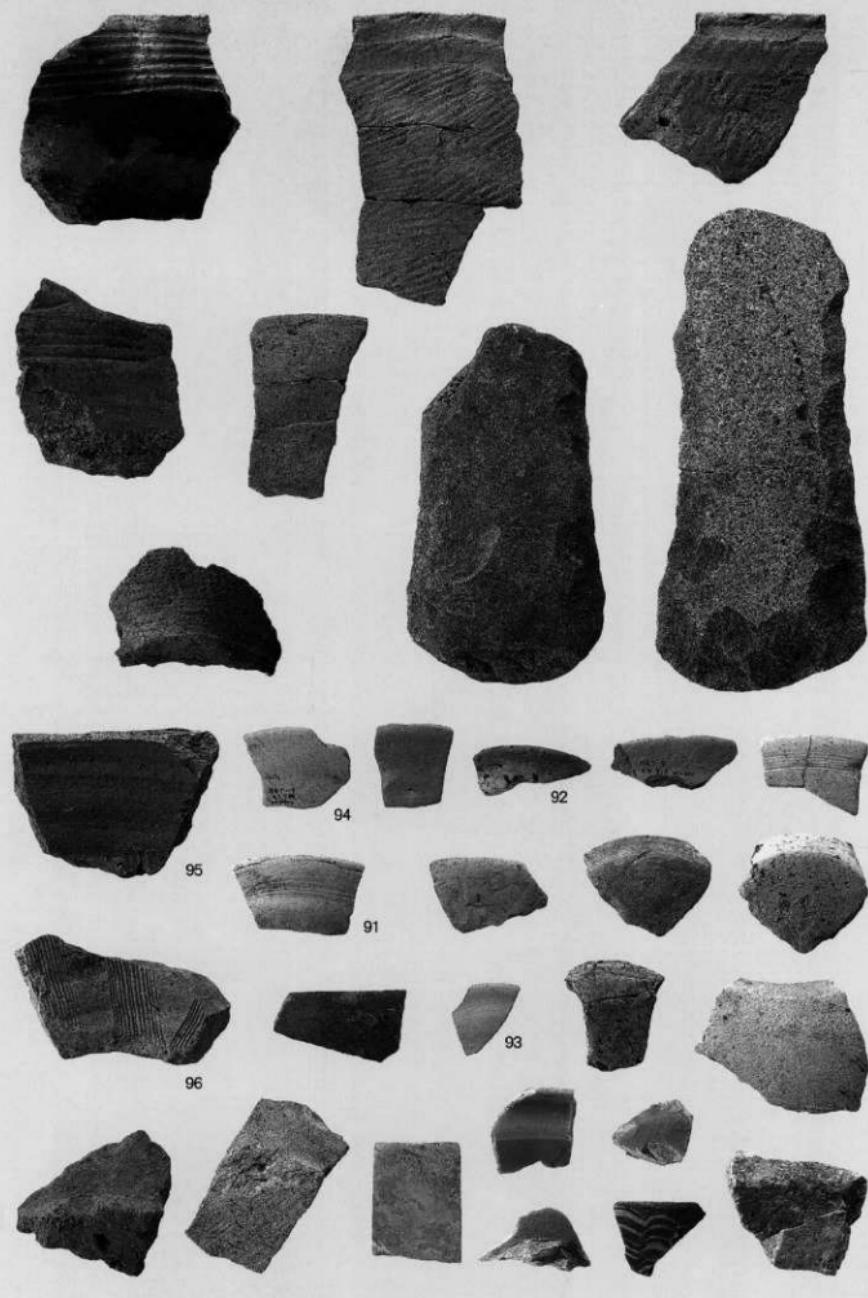
図版13 東殿遺跡8地区の遺物(1)



図版14 東殿遺跡8地区の遺物(2)



図版15 東殿跡8地区の遺物(3)



図版16 東殿遺跡9地区の遺物

報告書抄録

ふりがな	とやまけんなんとし ひがしとのいせき とくなりにいせき							
書名	富山県南砺市 東殿遺跡 德成II遺跡							
副書名	県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区に伴う 埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告（6）							
シリーズ名	南砺市埋蔵文化財調査報告書 11							
編著者名	佐藤聖子							
編集・ 発行機関	南砺市教育委員会							
所在地	〒932-0292 富山県南砺市井波520 TEL (0763) 23-2014							
発行年月日	西暦2006年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	。	。	。	。	
ひがしとの 東殿	富山県 南砺市東殿	16210	474	36度32分 48秒	136度54分 36秒	050601 ～ 050930	904m ²	県営ほ場 整備事業
とくなりに 徳成 II	富山県 南砺市徳成	16210	556	36度32分 46秒	136度54分 45秒	050714 ～ 050916	104m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東殿	集落	古代 中世		竪穴住居跡、掘立柱建 物跡、井戸、竪穴状土 坑、土坑、溝、ピット		縄文土器、打製石 斧、須恵器、土師器、 中世土窯器、珠洲、 白磁、青磁、越前、 瓦質土器		
徳成 II	集落	古代 中世		ピット		縄文土器、石器、土 師器、須恵器、中世 土窯器、白磁、越前		

県営ほ場整備事業（担い手育成型）北山田南部地区
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(6)

富山県南砺市 東殿遺跡 徳成II遺跡

平成18年3月

編集 南砺市教育委員会

発行 南砺市教育委員会

印刷 ハナカダ印刷

